元刊本『臨済録』について*

邢　　東　風**
（日本　愛媛大学）

臨済宗の創始者たる臨済義玄（？～866）の法脈は今に至るまで幾久しく受け継がれ、その語録もまた国内外に流伝し、広い地域に影響を齎している。中国の歴史においては、臨済の語録は主に『祖堂集』・『景徳伝灯録』・『四家語録』・『古尊宿語録』等、禅宗の灯史或いは語録集に見え、単行での臨済の語録集というものは比較的少ないと言える。これに対して、日本には古来『臨済録』と称される単行語録集が数多く存在している。各種の『臨済録』伝本には往々にしてそれぞれが辿ってきた経歴を示す痕跡が遺され、これらを通して『臨済録』そのものの変遷のみならず、関連する歴史文化までもが窺い得る。したがって、『臨済録』伝本に対する研究は、臨済宗史、延いては仏教史研究上の重要課題と言えよう。本稿で扱う元刊本『臨済録』は、『臨済録』の流伝を論ずる上で重要な伝本の一つである。

宋元期に在っては、無数の禅籍に対して編輯・整理および印刻が為され、出版されたそれらの書籍は遠く海外まで伝播することとなった。現存する禅籍の刊本のうち最古のものは、多くがこの時期に作られている。『臨済録』の刊本もまたこの例に漏れず、北宋の頃に初めて単行の刊本が登場する。これが元代に至って重刊され、程なく日本へも伝えられた。これ以後、日本においてはさらに多くの『臨済録』伝本が続々と現れることとなった。実のところ、北宋の単行『臨済録』は元代初頭においてすでに極めて稀少となっており、元刊本の出現によってはじめて北宋本の『臨済録』はその

---

*原題「元刊本《**临济录**》考辨」。本論文は日本学術振興会基金の助成による研究成果の一部である（課題番号：JSPS科研費26370045）。
**愛媛大学法文学部教授。

系譜を繋ぐことが出来たのである。『臨済録』の流伝史における元刊本の重要性は、これによって知られよう。しかるに、元刊本『臨済録』の事情に対する一般の理解は依然浅く、その真の姿は謎に包まれたままである。筆者の調査したところによると、元刊本『臨済録』は今なお存し、これは現在伝えられる最古の『臨済録』単行刊本であるのみならず、他の伝本には見えない内容をも含んでいる。専門的な考察を加える必要性が大いにあると考え、ここに取り上げる次第である。

一、元刊本の構成と流伝

現在中国国家図書館に収蔵される『臨済慧照玄公大宗師語録』一巻は、元代に上梓された『臨済録』である。本書は過去において新装と補修が為されており、また本来の巻頭はすでに失われ、元からあった部分の紙もかなり黄ばんでしまっている。今ある表紙や最初の頁、裏打ちされた紙などは修復の際に補われたものである。本書全体の構成を以下に示す。

1．表紙　黄裳による題記が存する。

元板臨済恵照玄公大宗師語録　袁寒雲旧蔵　庚寅新正黄裳題

この題記は黄裳の自筆に成り、1950年に識されたという。

2．扉　修復時に新たに加えられた頁であり、題跋と印記が見える。

此元板元印本臨済慧照玄公大宗師語録、袁寒雲故物、後入南林劉氏嘉業堂、劉氏書散、余收之市肆者也。中土已為無第二帙、而日本翻雕甚多。五山板中、是本間出、然往往変易旧式、不足取也。曽見室町中期所刊一本、大題後一行已後書慧然集、而于臨済上別加鎮州字様、如非此祖本尚存、何以知其割裂旧式耶。壬辰五月十六日閑窓展卷書小燕　黄裳百嘉

上記の題跋は1952年に書き入れられたもので、作者の小燕とは黄裳の夫人である。

これより以下は元刊本本来の紙の部分となる。

3．序文　題名：「臨済慧照玄公大宗師語録序」　著者：五峰普秀

序文は計２頁（半頁９行、１行20字）。第１頁に以下の印記有り。

黄裳鑑蔵　寒雲秘笈珍蔵之印　曽経南林劉翰怡收蔵
黄裳珍蔵図書印記

また第２頁の序文の末尾に原版の題記として次のように見え、序文の原版が銭良佑によって書写されたことが知られる。

呉中小生銭良佑敬書

4．本文　題名：「臨済慧照玄公大宗師語録」　全38頁（半頁10行、１行20字）。

本文第一頁に以下の標題・編者名・印記有り。

臨済慧照玄公大宗師語録
住三聖嗣法小師　恵然　集
黄裳蔵本　北京図書館蔵　黄裳容氏珍蔵図籍　黄裳

本文の書き出しは「府主王常侍与諸官請師陞坐、師上堂云」云々。第13頁は「勘辨」、第某頁から本文の末尾までが「行録」に当たる[1]。本文の内容は宋版『臨済録』と同様。本文末尾に以下の題記有り。

住鎮州保寿嗣法小師　延沼　謹書

臨済慧照玄公大宗師語録終

この本文末尾において宋版『臨済録』には存する「住大名府興化嗣法小師存奬校勘」および「住福州鼓山円覚芯芻宗演重開」の記が見えないことは、注意を要する点である。

これ以降は附録の部分となり、次に挙げる三篇の文章が含まれる。計11頁（半頁９行、１行17字）。

5.「大名臨済慧照玄公大宗師碑記」作者：郭天錫

6.「臨済慧照玄公大宗師真賛」作者：郭天錫

7.「真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘」作者：王博文

上に挙げた三篇は他からの転載であり、このうち郭天錫作の両篇は元刊本のみに伝えられる内容となっている。

8. 開版者署名　本書の巻末に存する。計１頁半（半頁11行）。以下にこれを記す。

嘉議大夫兵部尚書杭州路総管 梁曽

昭武大将軍両浙都転運塩使

通奉大夫僉江浙等処行中書省事 周文英

嘉議大夫僉江浙等処行中書省事 朶児只干

中奉大夫湖広安南等処行中書省参知政事

嘉議大夫江南浙西道粛政廉訪使 高叡

資善大夫江西等処行中書省参知政事

資徳大夫大司農河南江北等処行中書省参知政事

中奉大夫河南江北等処行中書省参知政事 安祐

正奉大夫江浙等処行中書省参知政事 李世安

正奉大夫江浙等処行中書省参知政事 忽都不丁

中奉大夫中書省参知政事 張斯立

資善大夫江淮等処行尚書省左丞 楊鎮

資善大夫江浙等処行中書省左丞 答述丁

資善大夫行宣政院使 也先忽都魯

資徳大夫河南江北等処行中書省右丞 燕公楠

資徳大夫江浙等処行中書省右丞 馬紹

資徳大夫中書省右丞 八都馬津

栄禄大夫福建平海等処行中書省右丞 脱脱

栄禄大夫行中書省平章政事 陳嵒

栄禄大夫福建平海等処行中書省平章政事 高興

栄禄大夫江西等処行中書省平章政事 史弼

栄禄大夫平章政事行宣政院使領財賦事 教化

栄禄大夫江浙等処行中書省平章政事 明里不花

栄禄大夫行宣政院使 都失

栄禄大夫中書省平章政事 梁徳圭

栄禄大夫福建等処行中書省平章政事 徹里

栄禄大夫江浙等処行中書省平章政事 也速答児

栄禄大夫河南江北等処行中書省平章政事 卜怜吉

光禄大夫江淮等処行尚書省左丞相 忙兀台

名簿中の人士は本書刊行の際の協賛者と思われる。この部分もまた元刊本独自のものである。

その他、本書最終頁の版框の外には黄裳による次のような題記がある。

黄裳珍儲元至元古刻和尚語録

この頁には三か所の印記が存する。そのうち一つには澄心堂とあり、一つは印記が不完全で見えず、もう一つは筆者には判読出来なかった。

また、本書のフィルム表紙には以下のような題記がある。

臨済慧照玄公大宗師語録一巻　唐釈慧然輯　附一巻　元刊本　一冊

この題記は『北京図書館古籍善本書目』の記録と基本的に一致する。この書き様からするとこの元刊本があたかも『臨済慧照玄公大宗師語録』とは別個のものであるかのように思われるが、実際にはこの両者は同一の書である。

以上が現存する元刊本の概要である。続いて、この書が伝えられてきた過程や関連する人物について些か述べたいと思う。

本書が辿った経歴について、書中の題記および印記によると近代以降は袁寒雲・劉氏嘉業堂・黄裳夫婦・北京図書館（後の国家図書館）の順でその所有者を替えてきたようである。それ以前の情況は今のところ分かっていない。

袁寒雲（1889-1931）とは袁世凱の次子であり、名は克文、字は豹岑、寒雲はその号である。詩書を耽読し、学識広博、多芸多才にして、詩文・書画に秀でて昆劇に精通したという。政治を厭って放逸な生活を送るなか、金銭を湯水の如く費やし、蒐集をその趣味としたと伝えられる。殊に古貨幣に知見を持ち、またその蔵書には宋元期の珍本が多く存した。袁世凱の死後は長く上海に滞在し、晩年生計の逼迫から所蔵の文物の大半を売りに出している。著書に『寒雲手写所蔵宋本提要廿九種』、『古銭随筆』、『寒雲詞集』、『寒雲詩集』、『圭塘唱和詩』、『辛丙秘苑』、『洹上私乗』等がある。小燕の題記には、本書はもと袁克文の所蔵であったものが、後に劉氏嘉業堂の手に渡ったのだと記される。

嘉業堂主とは劉承幹（1882-1963）を指す。字は貞一、号は翰怡、別号に求恕居士ともいう。浙江呉興（今の湖州市南潯鎮）の人。豪商の家に生

まれ、豊富な財力を持つ。商売のほか読書をよくし交遊を好んだといい、また版本目録にも通じたとされる。辛亥革命以降は上海に移住し、不動産業で富を築いている。折しも激動の時節に当たり、清の遺老らが多く上海に逃れるに伴って、古籍珍本もまたこの地に流入することとなった。劉氏は1910年代に大量の書籍を購入し、1924年には故郷の南潯に蔵書楼を建てている。この文庫は前皇帝溥儀により「嘉業堂」と命名された。蒐められた蔵書は最も多い時期で50万冊・60万巻に達したという。嘉業堂は書籍の収蔵のほか出版も行っており、『嘉業堂叢書』・『呉興叢書』・『求恕斎叢書』・『留余草堂叢書』等の善本を刊行している。すなわち、中国近代における最大規模にして最高の設備をそなえた私設文庫と言えよう。1930年代中期から劉氏は蔵書の一部を売却し始め、後にまた一部を上海へと移している。1950年代初め、嘉業堂の蔵書は浙江図書館に収められることとなり、それ以外の蔵書は各所に散らばったとされる。

小燕の題記には本書はもと袁克文の蔵書に在ったものが嘉業堂に移ったのであると言うが、それでは嘉業堂は何時これを入手したのであろうか。『嘉業堂蔵書志』の記載を按ずるに、この書が遅くとも1919年にはすでに嘉業堂に渡っていたことが知られる。本書巻三には以下のような記録が見出される。

> 慧照玄公語録一冊　元刻本
>
> 僧恵然集。玄公即普仁、号雪堂、臨済十八世孫、闡臨済之精言。前有普秀序、銭良祐書。後有郭天錫記及真賛、又有王博文撰碑、商挺題額、皆元初名人、後有杭州刊板名氏（筆者註：以下に「刊板名氏」の記が続く、今はこれを略す）[2]。

『嘉業堂蔵書志』の初稿は繆荃孫（1844-1919）により1917-1919年の間に作られた。上の文章は繆氏の著述にかかるものであるから、つまり彼が蔵書目録を記した当時、元刊本はすでに嘉業堂の所有であり、かつ本来有っ

た筈の巻頭部分も失われてしまっていたということが分かる。ただし、繆氏は誤って玄公を普仁と見做し、この書を普仁の語録としているが、「玄公」とは実に臨済義玄に対する尊称であって、本書は同人の語録に他ならない。また前に挙げた開版者の署名は、王博文碑文における立碑者による落款の直後にあるものの、立碑者の名簿よりも一段上げて記されているため、繆氏は恐らくこうした状況に鑑みてこれらの署名を以て「刊板名氏」としたのであろう。雪堂普仁とは本書刊行の発起人であり、「刊板名氏」とあるのは出版に関わった協賛者に当たると思われる。この他、『嘉業堂蔵書志』は原稿が作成されたのち長く公開されずにあり、1997年になってようやく出版されるに至った。したがって、上の記述は長きにわたり人々の目に触れることが無かったのである。

黄裳（1919-2012）は作家・記者として著名な人物であり、また劇作家・蔵書家としても知られる。本名は容鼎昌、満清の貴族の出身で、本籍は山東の益都（今の青州市）に存し、河北の井陘に生を受けた。筆名として黄裳・勉仲・趙会儀の称を用いる。南開中学に学んだのち、1940年代前後には上海交通大学電機系・重慶交通大学に籍を置き、アメリカ軍の通訳を務めたという。抗日戦争終息後、『文滙報』の駐重慶・南京特派員となり、次いで上海の編集部に戻って1949年には『文滙報』の主筆に就任する。1950年代には軍委総政越劇団脚本家・中央電影局上海劇本創作所脚本家・『文滙報』編集委員等を歴任した。広汎な学識と多芸多才で知られ、散文に長じ、演劇と古版本に精通したと伝えられる。その著述は甚だ富み、また所蔵の書籍は４万冊余りに達したという。夫人である小燕もまた彼と趣味を同じくし、蔵書の珍本には常に二人による題跋が見える[3]。黄裳と小燕の題記は1950年代初期に作られたものであるから、本書はこの当時彼らの所有であったということになろう。後年北京図書館に移管されたのが何時のことであったかは未だ詳らかでない。

小燕が題記中に指摘するように、この元刊本は目下世に唯一遺された孤本であるが、日本の五山版『臨済録』の親本でもある。ただし日本に伝わ

る刊本は底本に対して改変を加えている部分もあり、このような事情については元刊本に基づいて確認することが可能である。つまり、五山版は原型となる元刊本と完全に一致するという訳ではないが、ただこの書のみが元刊本の本来の姿を留めており、逆にこれを通して五山版における改変をも知り得るのである。小燕が日本の室町期刊本との比較に基づいて元刊本の価値を見出したことは、まことに慧眼と言うべきであろう。室町時代は1336-1573年の期間に相当し、日本のこの時期における『臨済録』刊本としては両種が存する。一つは永享九年（1437）刊本、もう一つは延徳三年（1491）刊本である。小燕の所謂「室町中期所刊一本」とは、永享九年（1437）刊本を指すものと考えられる。この刊本は五山版の一種であり、かつ日本においてはさらに若干の伝本がある。特に『大正蔵』第47冊に収録される『臨済録』は、都合の良いことにこの本を底本としているのである。要するに、小燕はたとえ永享本の原書を見ていなかったとしても、『大正蔵』本を通してその大勢が窺い得たということになる。元刊本中の臨済語録の標題は「臨済慧照玄公大宗師語録」とされるが、永享本には「鎮州臨済慧照禅師語録」につくられる。これはすなわち小燕が「于臨済上別加鎮州字様」と評するものであろう。この標題に続く一行にはさらに題記が存し、元刊本には「住三聖嗣法小師恵然集」とあり、永享本には「住三聖嗣法小師慧然集」と見える。ここで「恵」字を「慧」に改めているのは、小燕によって「大題後一行已後書慧然集」と記されるが如くである。このような両本の差異に鑑みて、小燕は五山版について親本に「割裂」を加えたものであると見做し、「不足取也」と結論している。しかしながら、五山版の親本に当たるのは恐らく宋刊本と元刊本の両本と考えられる。加えて日本伝本の中には元刊本中に本来有った内容が遺されているのであるから、本書には他に無い独自の価値が存すると言えよう。この点に関しては後述に譲りたい。

その他、黄裳は巻末の題記において「元至元古刻和尚語録」と言及しているが、ここで「至元古刻」と表現するのは、彼が本書の刊行年代を元代

の至元年間（1265-1294）と断定していたことを示している。実際には至元よりもやや遅れる大徳年間に刊行されたと推測される、これについても後に詳しく述べることとする。また「和尚語録」という呼び方は、この語録が臨済義玄のものであることを了解していなかったために大まかに「和尚語録」と称したものであろう。

1987年に北京図書館が編集した古籍善本書目の中には、以下のような記載がある。

> 臨済慧照玄公大宗師語録一巻　唐釈恵然輯　附一巻　元刻本　黄裳跋　一冊[4]

これによって、本書が遅くとも1980年代中期にはすでに北京図書館に収められていたことが知られる。

このように、本書に見える題記および印記に基づき改めて他の関係資料に照らし合わせることで、この書が近代以来辿ってきた経歴やこれに連なる人物を確認し、併せてその有するところの資料的価値について基礎的な判断を下すことが出来た。ただし、これらの題記や従来の著録中には不明瞭な部分や誤りも存するということに留意し、正否を甄別する必要があろう。

以後においては元刊本『臨済録』の内容について考察を述べることとする。このうち臨済語録の本文部分は宋版『臨済録』と基本的に同様であるためここでは扱わず、これ以外の部分を対象として検討を加えたい。

二、普秀による序文

この序文は具さには『臨済慧照玄公大宗師語録序』と称し、臨済語録の本文の前に位置している。これは現存する元刊本『臨済録』における唯一の序文である。日本の『臨済録』伝本中、この文を載せるものに二本があ

る。一つは『鎮州臨済恵照禅師語録鈔』（以下『臨済録鈔』）[5]、もう一つは『大正蔵』第47巻に収録される永享本である（以下『大正蔵』本）。ただしこれらの両書にはいずれも元刊本との間に少なからぬ文字上の相異が見受けられる。以下に挙げるのは元刊本から転記した序文に他の二本との対校を付したものである。

臨済慧照玄公大宗師語録序

窃以黄檗山高、便敢当頭捋虎、滹陀岸遠、亦能順水操舟、既露悪毒爪牙、仍顕慈悲手段。攔[6]腮一掌、免煩着歯粘唇、劈肋三拳、可謂傾心吐胆。三玄在手、七事随身、触之則石裂崖崩、擬之則雷轟電掣。門庭孤峻、閫奥宏深、只可望崖、不可趣向。茲者総統雪堂和尚、憫巴歌唱而和寡、嗟雪曲弾而応稀、語録闕文、叢林罕見、遂旁求釈子、而再起斯文、欲鏤板以広流通、俾参玄而得受用、弘揚祖道、垂裕後昆。棒頭喝下、須明石火電[7]光、正案傍提、要顧眉毛鼻孔。其它[8]機縁、備載前録、不労再挙。噫、臨済祖師、六伝而至汾陽大宗師、汾陽下傑出六[9]大尊者、曰慈明円、曰琅**琊**覚。慈明円伝陽[10]岐会、会伝白雲端、端伝五祖演、演伝仏果勤、仏鑑、天目齊、仏果勤伝虎丘隆、大慧杲[11]、虎丘隆伝応庵華、華伝密庵傑、傑伝破庵先、松源岳[12]、破庵先伝石田薫、薫伝浄慈愚極慧、松源[13]岳伝無徳通、通伝虚舟度、度伝径山虎岩伏、霊隠玉山珍。大慧杲伝仏照光、光伝淵翁琰、琰伝偃渓聞、聞伝雲峰高、天童鑑、雪峰聳[14]、天目齊伝汝州和、和伝竹林宝、宝伝竹林安、安伝竹林海、海伝慶寿璋、白澗一、帰雲宣[15]、慶寿璋伝海雲宗師[16]、竹林彝[17]、海雲宗師[18]伝可庵朗、竜宮玉、蹟庵儇、可庵伝太傅劉文貞公、慶寿満、竜宮玉伝大名海、蹟庵伝慶寿安、竹林彝伝竜華恵、白澗一伝冲虚昉･懶牧帰、帰雲宣伝平山亮、亮伝柏林璋、定林秀[19]。琅**琊**覚伝泐潭月、月伝毘陵真、真伝白水白、白伝天寧党[20]、党伝慈照純、純伝鄭州宝、宝伝竹林蔵、慶寿亨、少林鑑、慶寿亨伝東平汴、太[21]原昭、廓然安[22]、少林鑑伝法王通、通伝安閑覚、覚伝南京智・西庵[23]贇、南京智伝寿峰湛、西庵贇伝雪堂仁、雪堂乃臨済十八世孫也[24]。莫不門庭孤峻、機辯縦横、倶是克家子孫、灯灯続焔、直至如今、可謂源清流長、

此之謂也。雪堂乃吾三世[25]、嘱予[26]為序、率[27]爾書之、脳後見腮、頂門具眼者、大発一笑。開泰退堂襲祖第二十世孫五峰普秀斎沐焚香拝序[28]。

呉中小生銭良佑敬書

元刊本所収の普秀による序文は他の両本に比して40余字多く、この中には破庵先・石田薫・愚極慧・玉山珍・仏照光・溂翁琰・偃渓聞・雲峰高・天童鑑・雪峰聳・柏林璋・定林秀・廓然安ら、10余人の僧侶の名が含まれている。これらは他の二本には見えず、日本の刊本に遺漏があることを示すものであろう。ただし、例えば「雪堂乃吾三世」の後において「祖」の一字を補い、これによって文意を通りやすくしているように、日本伝本は元刊本に対して修訂を行ってもいる。いずれにせよ、元刊本は他の二本よりも普秀の序文の原貌を留めていることに違いはないと言えよう。

文中にはまず、臨済の禅法は非常に苛烈であったが、それは全く慈悲から来るもので、その目的は人々を悟りへ導くことにあったと説く。ただしその深遠な法門はともすれば絵に描いた餅のようにも感じられるものでもある。雪堂普仁は臨済の禅法がこのように高尚に過ぎることを憂え、また『臨済録』ですら目にすることが難しかった当時の状況をも鑑みて、この書を再び刊行することで世に広めんとしたのだという。これに続けて臨済義玄から雪堂普仁に至るまでの伝法の系譜が列ねられ、普仁が臨済宗第18代の法裔であると明かすとともに、臨済宗の法脈が長い歳月を経て受け継がれていることを提示する。そして最後の部分では、作者自身が雪堂普仁の三世の法孫に当たること、この序文が普仁の依嘱によって作られたものであることを記している。

この序文の作成年代について、陸川堆雲は「元の至元時代、西暦1360年頃」としているが[29]、その根拠は明らかにされていない。私見を述べるならば、この序はそれ程に遅い時期に作られたものでは有り得ないと考える。序文中には明らかに「雪堂……嘱予為序」と見え、作者が普仁の孫弟子であるからには、大師匠からの頼みをそう長いこと放置出来よう筈もない。

また、元刊本の中には普秀によるこの序文の外にも元々従倫と郭天錫による二篇の序文が存し、これら三序はいずれも普仁からの依頼によって書かれたものである。このうち郭序は大徳二年（1298）の作であるので、普秀の序が著された時期もこれとさほど異ならないであろう。

普秀に関しては史書に記載が見えないものの、この序文によって雪堂普仁の法孫であることが知り得る。彼の著作には他に「梵網経菩薩戒序」一篇があり、ここにおいても雪堂普仁に対する言及が為されている。

序文を筆写した銭良佑（1278-1344）は元代の著名な書家であり、字は翼之、蘇州の人と伝えられる。かつて至大年間（1308-1311）に呉県の儒学教諭に任ぜられたが職位を奪われることとなり、以来官職に就くことはなかった。質素倹約を旨とし、他者を恃みとしない人柄であったという。その家中は常に客人で溢れ、宴席に詠歌して虚日無く、趙孟頫・鄧文原と特に親交が深かったとされる。また地方の子弟が入門しにやって来ても、決してこれを拒むことがなかった。篆・隷・真・行・小草と各種の字体に精通し、朝廷の令旨を奉じて『農桑輯要』・『大学衍義』を書写している。晩年に自ら「江村民」と号したことから、「江村先生」と称された。著書として詩文の雑録若干巻が存する[30]。現在銭氏の書道作品としては「右軍書扇図」・「管道昇書巻」等が伝わるが、この序文もまた銭氏の筆に成る貴重な資料である。

郭天錫による序文は臨済宗における伝承の系譜を叙することを主眼とするものであり、作者の意図するところが普仁の連なる法脈の淵源を示すという点にあるのは明らかである。しかるに郭氏はここでただに雪堂普仁と直接関わりを持つ伝承系統を談ずるのみならず、元代に至るまでの石霜楚円および琅琊慧覚の両系統についての相承をも記載している。殊に金元期の伝承系譜に対する言及は詳細であり、禅宗史書に見えない人物、或いは伝の記載に誤りのある人物が数多く含まれる。天目齊系統の白澗一・帰雲宣・冲虚昉・懶牧帰・平山亮・竹林彝・竜華恵・竜宮玉・大名海・柏林璋・定林秀、琅琊覚系統の天寧党・慈照純・鄭州宝・慶寿亨・竹林蔵・少林鑑・

東平汴・太原昭・廓然安・法王通・安閑覚・南京智・西庵贇・寿峰湛等はその例である。このうち一部の者の身分については他の資料によって確認し得る。

例えば竹林海とは灯史及び趙孟頫の『臨済正宗碑』中に見える「海西堂容庵」のことであり、万松行秀と同時代の人物である。『渾源州永安禅寺第一代帰雲大禅師塔銘』によると、容庵は金の宣宗の興定四年（1220）に竹林寺西堂に退隠し、それから幾ばくもなく逝去したとある。弟子の慶清はかつて仰山の栖隠寺にて万松行秀に九年の間師事し、その後竹林海の下に投じ（「復参竹林海公、……父子投機、箭鋒相拄」）、竹林寺の住持となったとされる[31]。「竹林」とは燕京の西郊、馬鞍山の竹林寺を指し、潭柘寺とも遠くない位置にある。初め唐代に建てられ、金の海陵王の時代に臨済僧広慧通理（1104-1175）が当寺の住持となり、寺宇の大部分を解体して煉瓦や屋根瓦を潭柘寺の増築に充てたと伝えられる[32]。したがって竹林寺は潭柘寺の前身とも言い得るであろう。元・熊夢祥の『析津志』には、竹林寺について「古徳海公所住、迄今宗門有録曰海西堂是此也」と記される[33]。ここに「古徳海公」・「海西堂」と言うのは容庵を指し、竹林寺の住持であったことから「竹林海」とも称された。金元期には容庵以外にも多数の臨済僧が竹林寺の住持を務めており、当時においてこの地が臨済宗の重要拠点であったことが知られる。また史料の記載を按ずるに、天目齊自身の枯淡な人柄を反映したものか彼の法流は従来清修を重んじ、「法席寥然」と伝えられるが如き状態にあったが、これが容庵海の時に至って変化を見せる。当時容庵の名声が頗る高かったことに加え、再伝の弟子である海雲印簡の努力もあって、天目齊の系統はついに隆盛することとなったのである[34]。すなわち、竹林海は天目齊の系統の発展史を論ずる上で画期となる人物と言えよう。

白澗一は金末・元初の臨済僧で、僧伝史料には「廓楽一公」とも称される。かつて真定（今の河北省正定県）西牛寺と燕京の大慶寿寺に住持し、弟子に潭柘寺の古源福源がある[35]。その他の弟子に虚閑（智顔）という者

もいる。彼は若い時分には教亨に師事していたが、後に燕京に至った際「廓楽公為当世冠」と耳にするやこれの門弟となり、五年後に印可を得たという。さらに後年には一時潭柘寺の住持にもなっている[36]。この伝によっても白澗一の当時における名声が窺われる。

帰雲宣はその法名を志宣（1188-1246）といい、字は仲徽、帰雲はその号である。俗姓は李、広寧（今の遼寧省北鎮市）の人。若くして出家し、燕京の玉泉寺に赴いて容庵に師事する。また容庵が竹林寺に転住したのに随い、以降、義州宝林寺・渾源永安寺・趙州柏林寺・広寧薦福寺等七箇の名刹に歴住している。1243年春、燕京にて伝戒法会が催され、天下の名禅師らが集められた。志宣はこれを「祖令不振」と慨嘆し、召請に応じなかったという。著作に『語録』・『帰雲集』等が存し[37]、信亮・道因ら百余人の弟子があったとされる。序文に見える平山亮とはこの信亮を指す。1247年、海雲印簡（1202-1257）が潭柘寺において志宣の舎利塔を建て直しているが、信亮もまたこれに参与している[38]。

慶寿璋は、禅宗史書中においては和璋の名で知られる。号は中和。容庵海の弟子で、海雲印簡の師に当たる。燕京の大慶寿寺に住したとされ、明清の灯史には彼の言葉のみが伝えられる[39]。「海雲碑」の記述には、義州（今の遼寧省義県）の人で、1232年に卒したとある[40]。

竹林彝は海雲の同学であり、彼もまた金末・元初の臨済僧である。弟子の竜華恵（慧）とは潭柘寺の道慧（1223 ? -1292 ?）を指す。潭柘寺にある「慧公禅師之塔」（1292年建立）の銘文によると、道慧の俗姓は史、宣徳府（今の河北省宣化県）の人。5歳にして郷里において出家し、長ずるに及び奉聖州（今の河北省涿鹿県）竜岩寺の伯達倫公に事えた。後に倫公が燕京に赴くとこれには随わず遊学し、ついに潭柘寺の懶牧帰の元に投じたという。懶牧帰の死後は雲居寺現公を拝して入室弟子となり、一年ののち竹林寺の第23代住持に任ぜられる。寺宇の修理に功が有ったとされ、また「以竜華自号」とある。竹林・雲居の二大寺院を兼主したという[41]。

冲虚昉とは「海雲碑」中に所謂「冲虚昉公」である。燕京・大慶寿寺の

長老であり、以前には当寺の住持を務めている。

懶牧帰とはすなわち懶牧悟帰のことであり、かつて渾源州永安寺・燕京大慶寿寺および潭柘寺に住したと伝わる。弟子に大都白瀑寺の本勤（1209-1290）・竹林寺の道慧がある[42]。

竜宮玉・可庵朗・頤庵儇の三人はいずれも海雲印簡の弟子である。竜宮玉とは『海雲碑』に見える「竜宮道玉」を指し、西京（今の山西省大同市）の大竜宮寺に住したという。可庵朗はかつて易州（今の河北省易県）の興国禅寺に住した可庵智朗のことで、海雲が漠北に赴く際に随行してクビライ大王に見えたという事跡が伝えられる。また真定・臨済寺の住持を経て、後に海雲より託されて大慶寿寺の住持を継いでいる。概ね1267年頃に没したと見られる[43]。頤庵儇については、史料によっては「賾庵儇」にもつくられるが、恐らくは「海雲碑」中の「頤庵福真」のことであろう。海雲が竹林寺（現在の潭柘寺である）の住持であった際、彼を後継者候補の一人として推していたという。また趙孟頫の「臨済正宗碑」には彼と可庵智朗とを並べて列し、海雲の二大弟子としている。

慶寿満とは「臨済正宗碑」に見える「篳庵満」を指す。可庵智朗の弟子であり、かつて真定・万歳禅寺の住持に任ぜられている[44]。王博文の「臨済道行碑銘」には「僧統満公」と称され、これにより彼が至元二十四年（1287）当時燕京の大慶寿寺において僧統の役を担い、雪堂普仁と協議して共同で臨済の碑を立てたことが知り得る。

慶寿安とはすなわち西雲子安の別称である。元貞元年（1295）大慶寿寺に住持し、元の武宗は彼に「臨済正宗之印」を頒って臨済宗を統領せしめたという。また趙孟頫に命じて碑文を書かせ、これを刻んだ碑を正定・臨済寺に立てている[45]。大徳九年（1305）、朝廷より「仏光慈照明極浄慧大禅師、官栄禄大夫、大司空、領臨済一宗事」と賜号される[46]。成宗・武宗・仁宗の三朝を通して、約十七、八年の間大慶寿寺の住職を務めた。金元代に在って、燕京の大慶寿寺は一貫して臨済宗の中心拠点であり続け、さらに元朝のこの時期において住持となった者の多くは海雲の法流を汲んでい

る。つまりこの時、同系統は天下の臨済宗を束ねる地位にあったということになる。西雲子安は元の武宗による加封を経て、これによって自らの系統を行政が指定するところの「臨済正宗」にまで発展せしめたのである。天寧党・慈照純・鄭州宝はいずれも金代において河南の地を中心に活躍した禅僧である。慈照純（？-1152）の塔銘によると、彼は成都霊泉（今の成都竜泉鎮）に生まれ、若くして出家したとされる。19歳の時遊学して汝州香山観音禅院に住し、党公に十余年の間師事している。その後鄧州丹霞寺に移り、鄧州守范某の奏請によって紫方袍を賜り「慈照」と号したという[47]。鄭州宝（1085-1170？）は「普照宝」とも称し、滎陽洞林大覚禅寺の第一世となった高僧である。後に鄭州普照寺に住するに至っては、「名震河洛」と伝えられるが如く、当時において一層の尊崇を集めたとされる。禅宗の灯史においては彼の法系について曖昧に記述していたり、さらには曹洞宗の僧である磁州の大明宝と混同している場合や彼を大明宝と同じく青州希辨の弟子であるとしていることもあるが、彼と大明宝は無関係である[48]。

宝公門下の数多の弟子において、慶寿亨・竹林蔵・少林鑑の三名は最も傑出した者たちである。このうち慶寿亨とは慶寿教亨（1150-1219）を言う。嵩山戒壇寺・韶山雲門寺（今の河南省澠池県に存する）・鄭州普照寺・林渓大覚寺・嵩山法王寺・燕京大慶寿寺等に歴住したとされ、『仏祖歴代通載』巻20および『大明高僧伝』巻５に伝が存する。教亨もまた金代臨済宗の高僧であったが、後世に編まれた禅宗史書中においては彼も鄭州宝と同様に、誤って曹洞宗の系統に組み入れられてしまっている例が往往にして見える。また少林鑑とは嵩山・少林寺に住し、金の大定十九年（1179）に師兄であった法海（1132-1178）のために「少林寺海禅師塔銘」を撰した少林悟鑑を指す[49]。竹林蔵が住した竹林寺は、嵩山一帯における著名な古刹として知られる[50]。この三者各々の特色を評するに当たっては、慶寿亨は「雄文逸翰、咳玉噴珠」として文辞に堪能であったといい、少林鑑は「機鋒罔測、変化無窮」とその明敏を称えられ、竹林蔵もまた「禅学隠密、道眼通

明」と伝えられている[51]。少林悟鑑の弟子の法王通とは恐らく登封・法王寺の住持であった者であろう。

その他、柏林璋は趙州（今の河北省趙県）の柏林寺に、定林秀は正定の定林寺に住した者と考えられる。

以上のように、この系譜中には金元期に活躍した北方の臨済宗僧侶が非常に多く見出される。彼らの詳細に関しては、禅宗史書中に所属の系統が伝わらないものや、他の史料に断片的に記されるものなどが存する。しかるに、この系譜によってこれらの僧らが実に臨済宗の伝承系統に位置付けられることが確定され、また関連する寺院・人物の伝記における空白を補うことも可能となる。この系譜が有する史料的価値が改めて確認されよう。

三、郭天錫による『碑記』と『真賛』

元刊本においては臨済語録本文の後に郭天錫による両篇の文章が附される。一篇は「大名臨済慧照玄公大宗師碑記」（以下「碑記」）であり、もう一篇は「臨済玄公大宗師真賛」（以下「真賛」）である。この両篇の文は他の『臨済録』伝本には見えず、元刊本特有の史料という点で殊に貴重である。以下に両文を転記する。

大名臨済慧照玄公大宗師碑記

千金之子、擅山海富、必有契券為之守。三軍之帥、擁金革衆、必有鉄鉞為之権。万乗之国、居社稷重、必有宝玉為之鎮。蓋其托于物者専、故其伝于時者遠也。惟大雄氏則不然、爰自西夏、流教諸華、木本水源、枝衍派接、至于今茲、為人天之所瞻仰、為国王大臣之所崇敬、為居士長者、凡夫外道之所向慕、是非有宝玉之鎮、鉄鉞之権、契券之守之托也、而其伝之遠、雖百千万世未可知得、非其所托者不惟其物、而惟其人乎。伝之可以遠、托之得其人、未有如臨済宗之盛者也。臨済者、曹州南華邢氏子、黄檗運禅師之嗣、南岳讓禅師之四世孫、名義玄、謚慧照、塔曰澄霊、其所住鎮州道場曰臨済、

世遂称之曰臨済宗。蓋自南岳以来、他宗莫与抗。師自幼負志出塵落髪、受具便参禅宗、于黄檗会中、親受提警、奪钁栽松、種種悟解、往来大愚、潙仰間、印証円成、黄檗遂挙其師百丈禅板、几案授之。及其住臨済也、正声雷行、学侶雲集、趙州、竜牙、雖致座下、乃師法叔之行、諸方晩出、深以不得受鉗錘為恨。其所成就、自宝寿沼、三聖而下二十有二人、皆嶄然露頭角、称其家児。而興化奬公禅師、独能寿其伝、今之称臨済宗者、皆興化嗣也。師示滅于大名興化寺之東堂、説伝法偈四句云、法流不止問如何、真照無辺説向他。離相離名還自禀、吹毛用了急須磨。偈畢、竟以正法眼蔵付三聖然、実唐咸通八年歳丁亥四月十日也。闍毘、乞得舎利無数、分塔為二。一曰大名、一曰真定。懿宗与之謚、賜之名、平生金章玉句、如三玄三要、奪境奪人等語、無慮数十則、天下学子、至今藉為入道之門、而其法嗣又所至能闡揚其宗風。自興化奬而下、四世至汾陽昭禅師、其上足曰慈明円、曰琅琊覚。慈明円四伝而至仏果勤、仏鑑、天目齊。仏果伝虎丘隆、大慧杲[52]。虎丘隆三伝至破庵先、松源岳。破庵先伝石田薫、薫伝浄慈愚極慧、松源岳伝無徳通。通伝虚舟度、度伝径山虎岩伏、霊隠玉山珍。大慧杲四伝至雲峰高、天童鑑、雪峰聳。天目齊四伝至竹林海、海伝慶寿璋、白澗一、帰雲宣。慶寿璋伝海雲宗師、竹林彝。海雲宗師伝可庵朗、竜宮玉、蹟庵儇。竹林彝伝竜華恵。白澗一伝冲虚昉、懶牧帰。帰雲宣伝平山亮、亮伝柏林璋、定林秀。可庵伝太傅劉文貞公、慶寿満。竜宮玉伝大名海、蹟庵伝慶寿安。琅琊覚六伝而至鄭州宝、宝伝竹林蔵、慶寿亨、少林鑑。慶寿亨伝東平汴、太原昭、廓然安。少林鑑伝法王通、通伝安閑覚、覚伝南京智、西安贇。智伝寿峰湛、贇伝雪堂仁。雪堂乃臨済嫡後之孫也、国王大臣無不敬之以礼、皇兄晋王后妃公主駙馬、各賜金錦法衣。茲来東南方、且択名山勝地、称述慧照道徳、樹石刻書、伝示永久。由咸通至今七丁亥、四百二十載、由臨済至雪堂、十有八伝、而灯灯相続、心心相照、口口相授、如坐一堂、如卧一席、如経一刹那頃、等無有異、是豈非所托以伝者惟其人乎。而况水竜陸象、諸有力人、世世生生、為之護持正法、則其伝雖百千万世、未可知也。至元丁亥九月、前監察御史北山居士郭天錫記

臨済玄公大宗師真賛

這阿師、太奇絶、状貌堂堂如古月。親従黄檗山中来、又要大愚重喋喋。三尺殺人刀、殺人須見血、倒提正令行諸方、把断諸方不容説。機鋒厳峻似難当、就里婆心元太切。西瞿耶尼、北郁単越、香満乾坤開五葉。雲門曹洞非無人、近代児孫頗消歇。君不見天南天北臨済灯、万古光明長不滅。北山居士郭天錫盥手焚香拝賛

「碑記」はまず、臨済宗の相承が何がしかの外的な権威に基づいて行われてきたという訳ではなく、継嗣は飽くまでその者の適性に鑑みて選定されてきたと述べ、これによってはじめて法流を不断に受け継ぎ繁栄させることが出来たのであると説く。続いて臨済義玄の経歴を紹介したのち臨済の法脈における師承を示している。郭氏はここで興化存奨が果たした重要な役割を指摘しつつ、慈明楚円と琅琊慧覚の両系統における伝承系譜を挙げているが、系譜の内容は普秀の記述と基本的には同様である。また最後にはこの文章を著した経緯について述べている。当時雪堂普仁は臨済義玄を世に知らしめるために「石を樹て書を刻んだ」とあるが、これはすなわち「大名臨済慧照玄公大宗師碑」を建立し『臨済録』を新たに刊行したことを指すものであり、ここにおいて郭氏はこの「碑記」をつくることとなったのである。「碑記」とこの後に続く王博文の「臨済道行碑銘」の内容によって、当時雪堂普仁は大名（今は河北省に属する）の興化寺と真定の臨済寺の二か所において、臨済の伝を記した石碑を建てたということが知られる。郭氏の「碑記」は以前興化寺において刻まれたとあるが、碑石は現在残っていない。この碑文が元刊本『臨済録』に収められ、今また日の目を見ることが叶ったのは全く僥倖と言える。

「真賛」は臨済義玄の画像（写真）に寄せてつくられた讃歌であり、臨済の禅法が厳しく苛烈なものでありながら、その内心は慈悲に溢れていたことを称賛する内容である。文中の記述から、当時臨済の法脈が広く流伝していたのに対し、雲門宗と曹洞宗は寧ろ振るわない情況にあったことが

窺われる。

この「碑記」は至元二十四年（1287）に著され、作者の署名として「前監察御史北山居士郭天錫」とある。それから11年を隔てた大徳二年(1298)、郭氏は元刊本『臨済録』のために序文を書いたのである。その題目は「臨済慧照玄公大宗師語録序」とも呼ばれ、本序は現存する元刊本には見えないものの、前述した両種の日本伝本（すなわち『臨済録鈔』および『大正蔵』本）において認められる。郭天錫については、以前彼を郭畀と同一人物と見做して論ずる向きがあり[53]、これによって却って混乱を生じたという経緯がある。実際には、元代においては両名の郭天錫が存在したのである。一人はここに言うところの郭天錫（1227-1302）であり、字は祐之、号は北山、金城（今の山西省応県）の人と伝えられる。元代初期の著名な書画蒐集家であり、かつて監察御史に任ぜられ、至元二十二年（1285）頃以降は杭州に寓居している。理問官を務め、鮮于枢が主催する池上の遊興に参加して、鮮氏のほか趙孟頫・喬簣らとも親交が有ったとされる。その收蔵品は今に至るまで世に伝えられる。もう一人は郭畀（1301-1355)、その字を天錫という。号は思退、丹徒（今の江蘇省鎮江市）の人。元代後期の著名な書家・画家である。鎮江路学録・饒州路鄱江書院山長・処州青田県腊原巡検・江浙行省椽史に任ぜられ、その日記と書画作品は現存している[54]。元刊本中の郭序および「碑記」と「真賛」の作者は元代初期に活躍した金城の郭天錫で相違なく、郭畀とは何等の関わりもないことを一言しておく。

四、王博文の『臨済道行碑銘』

この碑銘は郭氏による「真賛」の後に収録され、具には「真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘」といい、原本は真定・臨済寺の「臨済道行碑」に書かれた碑文である。後来碑石が失われるに至っては、ただこの碑文のみが伝えられることとなった。この文章は元刊本『臨済録』に収められる

ほか、日本伝本にも見出される。一つは前述の『臨済録鈔』、二つ目は元禄十一年（1698）刊本『臨済語録摘葉』（以下『摘葉』）[55]、三つ目は享保十二年（1727）刊本『鎮州臨済慧照禅師語録』である[56]。今日に至るまで、享保本の新印本に基づいてのみこの碑銘について検討し得るとされてきたが、元刊本と照らし合わせるに日本伝本とは多少の異同が存する。元刊本に見える当碑銘を底本とし、日本伝本を参照して作成した校記を付して以下に載せる。

真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘

正議大夫御史中丞行御史台事 王博文 撰并書

通奉大夫参知政事枢密副使 商挺 題額

仏氏之祖、由毘婆尸七世至釈迦牟尼、嗣釈迦之法者、迦葉尊者為第一祖、由迦葉二十八伝而得達磨。達磨至中国為初祖、伝至大鑑、大鑑[57]号曹渓、始派別為五。大鑑伝南岳讓、讓伝馬祖一、一伝百丈海、海伝黄檗運、運伝臨済、此臨済一宗相伝授之大概也。師諱義玄、姓邢[58]氏、曹之南華人。性穎異、以孝聞郷里。幼喜仏氏之学、既落髪受具、即留心于経論、窮幽探賾[59]。既而曰、此済世之医方也、非教外別伝之旨。遂従事于禅宗、参黄檗運禅師、証拠提警、意融心会、引伸触長、種種解悟、而又切瑳于大愚、潙山間、以至道業純一、夐出儕輩、黄檗遂以其師百丈之禅板、几案授焉。唐宣宗大中八年、行脚至真定、住子[60]城東南臨済院。以其近于滹陀[61]之津渡、遂以臨済自名。後太尉墨君和舎宅為寺、迎師居之、亦号臨済焉。師道価既高、当時聞人勝士、咸来向慕、無間遠邇、問法求道、肩摩踵接。普化、克符二上座、乃師法叔[62]行也、以雄傑相与輔翼、而甘処下風焉。其善知識如竜牙、洛浦、麻谷、鳳林、皆炷香敷具、願執弟子礼、但得一言半句発薬者、即成令器。既而往河中、府主王常侍延以師礼。住持未幾、杖錫帰大名、居興化寺之東堂。一日摂衣拠座、与三聖然公問答、即以正法眼蔵授之、而説偈曰、源流不止問如何、真照無辺説向他。離相離名[63]還自禀、吹毛用了急須磨。説此偈竟、端然而逝[64]、実懿宗咸通八年四月十日也。茶[65]毘所得舎利、其徒分而為二、一塔于

魏府、一塔于鎮陽。詔謚曰、慧照禅師、扁其塔曰澄霊、子孫相継主之。金国兵興、寺為焦土、唯塔独存、巋然于瓦礫中。大定二十三年、世宗夜夢師乞徙塔于浄域、遣使視之、果為糞壤[66]蕪穢所埋擁。使還以聞、世宗命官吏率高行師徳董其役、距故址進二十歩、樹磚浮図九級、蔵舎利焉。皇朝撫有方夏、為主僧所居、殿宇荒[67]摧。海雲大宗師、臨済之十七世孫也。監寺定明、白府致礼、請海雲主是席。丙午春、復為十方禅寺、命其嗣子庵主通公、慵庵堅公、可庵朗公相継住持。殿宇仏像、荘厳完好、皆海雲之力也。師伝授之法、曰三玄三要、賓主料揀、四喝八棒之属、洪規深旨、為天下学者入道之門、皆師之所自得、非授之于黄檗也。嗣師之法者、若子若孫、為竜為象、不可殫紀。其大略則由興化奬而下、四世而至汾陽昭、其上足曰慈明円、曰[68]琅琊覚。慈明円伝楊[69]岐会、会伝白雲端、端伝五祖演、演伝仏果勤、仏鑑、天目齊。仏果伝虎丘隆、大慧杲[70]。隆[71]伝応庵華、華伝密庵傑、傑伝破庵先、松源岳、先[72]伝石田薫、薫伝浄慈愚極慧。岳[73]伝無徳通、通伝虚舟度、度伝虎岩伏[74]、玉山珍。大慧伝仏照光、光伝淛翁琰、琰伝偃渓聞、聞伝雲峰高、天童鑑、雪峰聳[75]。天目齊伝汝州和、和伝竹林宝、宝伝竹林安、安伝竹林海、海伝慶寿璋、白澗一、帰雲宣[76]。璋伝海雲宗師、竹林彝[77]。海雲伝可庵朗、竜宮玉、蹟庵儇。朗伝太傅劉文貞公[78]、玉伝大名海、儇伝慶寿安[79]。竹林彝伝竜華恵、白澗一伝冲虚昉、懶牧帰。帰雲宣伝平山亮、亮伝柏林璋、定林秀[80]。琅琊覚伝泐潭月、月伝毘陵真、真伝白水白、白伝天寧党、党伝慈照純、純伝鄭州宝、宝伝竹林蔵、慶寿亨、少林鑑。亨[81]伝東平汴、太原昭、廓然安[82]。鑑[83]伝法王通、通伝安閑覚、覚伝南京智、西庵贇。智伝寿峰湛、贇伝雪堂仁[84]、由臨済十八世矣。至元丁亥秋八月、雪堂賚聖上御香、将詣杭淛諸名刹焚修祝厘、至広陵、来謁予言、山僧今年春過鎮陽、拝臨済祖師塔、撫循遺迹、旌紀寂寥、因与僧統満公議、将以師之道行刻之貞石、以詔学者、幸公為我当筆也。予固辞、不許、即相与考証諸家伝録、以次第之。謂雪堂曰、自曹渓派而為五之後、今法眼、潙仰伝者至少、雲門、洞下差多于二家、唯臨済一宗演溢盛大。既為嗣法高弟、発明師之宗旨、昭揭師之学行、俾伝無窮、宜矣。仍系之以銘曰、

達磨至中国、伝仏法与心。

無言語文字、直超向上尋。

神光最堅篤、雪立不厭深。

豁然悟本体、提印開未今。

六祖派為五、同鐘而異音。

四伝得黄檗、黄檗伝臨済。

臨済何雄偉、竜象真[85]可擬。

钁頭下承[86]機、虎須辺悟旨。

鏟除諸相妄、洞徹万物理。

毎与学者云、馳求漫労耳。

得真正見解、仏祖不遠矣。

只于赤肉団、有無位[87]真人。

十方与三界、在汝屋与身。

持求唯自信、殊勝自相親。

一棒与一喝、機鋒砉然新。

盲癩莫漫来、鵝王食乳真。

雷惊師子吼、魔魅倶消淪。

耆宿善知識、蜂附而蟻聚。

門人与高弟、竜騫而鳳翥。

付却正法眼、径帰兜率去。

曹渓唯此脈、如海百川赴。

一灯発千灯、散為万宝[88]炬。

神光照十方、不在舎利数。

高名伝万古、不在澄霊固。

骨朽舎利塵、自在不亡[89]住。

書此刻貞珉、庶俾後学諭[90]。

年　月　日　立石大功徳主

前江淮福建等処釈教総統十八世孫雪堂野衲　普仁　立石

杭州浄慈寺住持襲祖伝法十七世孫愚極　至慧
杭州霊隠寺住持襲祖伝法十八世孫玉山　徳珍
杭州径山寺住持襲祖伝法十八世孫虎岩　浄伏

碑文の作者である王博文（1223-1288）については、字は子冕、号は西渓、東魯の人と伝えられ、後に彰徳（今の河南省安陽市）に居を移したという。若くして儒生となり、李冶の薦によって藩王クビライに仕えた。蒙古の憲宗による南征に従い、河東山西道提刑按察使・礼部尚書・大名路総管・江南道行御史台中丞等を歴任したという。また至元十七年（1280）には『史丞相祠記』を著して史天沢の事跡を記している。また真定在住の元曲作家である白樸と非常に親しかったとされるため、恐らく彼は真定の事情についてかなり熟知していたものと思われる。また碑額を書した商挺（1209-1289）は、字は孟卿、曹州済陰（今の山東省菏沢市）の人である。1233年、蒙古軍が汴京（今の河南省開封市）を占領したために故郷を離れて北上し、1253年に藩王クビライに召されて陝西に赴き、以降宣撫副使・僉陝西行省事・中書参知政事・行四川枢密院事を務めた。1264年に入朝し、参知政事・安西王相・枢密副使等を歴任する。伝は『元史』巻159に見える。これらの二人は雪堂普仁と元々交流があり、その縁で石碑建立の事業に参加することとなったのであろう。

碑銘本文の主な内容を挙げれば、まず達磨から臨済義玄に至るまでの伝承系譜、続いて臨済の求法修行の経歴、臨済去世後の舎利塔修建および金代における臨済塔重建の事跡が記されている。臨済の舎利塔については、『臨済録』中には「門人以師全身建塔于大名府西北隅」とあり、大名府の一基のみが言及されているが、この碑文および上記の郭天錫による碑記によれば、当初魏府（今の河北省大名県）の興化寺のものと鎮陽（今の河北省正定県）の臨済寺のものとで計二基の舎利塔が建てられていたことが知られる。北宋の末年に金軍が南進し、宋・金両陣営は真定にて激戦を繰り広げ、臨済寺もまた戦火に焼かれるところとなった。金の世宗の大定

二十三年（1183）に至ると、塔がもと在った場所の附近に九重から成る煉瓦造りの塔が新に建てられ、「唐臨済慧照澄霊塔」と名づけられた。この塔は今もなお存する。1966年の邢台地震でこの塔が崩落した際、その瓦礫の表面に「大定二十五年平山県匠人鋳相輪」の文字が確認された。これは碑文の内容とも一致し、互いに互いの裏付けとなるものと言えよう[91]。この他臨済塔の名称については、『宋高僧伝』巻12には「塔号澄虚」とあるが本碑銘および郭天錫の碑記には「塔曰澄霊」と見え、『宋高僧伝』の記載に比してより正確である[92]。

次に、海雲印簡とその弟子が臨済寺の住職となった経緯や、臨済義玄の独特なる禅法、また興化存奨以下の臨済宗における伝承系譜について述べたい。海雲が臨済寺に住持したのは、当時臨済寺の監寺であった定明和尚の求めによるものである。『海雲碑』の所載に基づくなら、これは1235年の出来事であり、この時鎮陽の史帥が上疏して海雲に当寺を領することを求めたとある。海雲はこれが臨済禅師の道場であることに鑑みてこの命を受諾し、着任するや早速寺宇の修復に努めたという[93]。ここに言う鎮陽の史帥とは、すなわち史天沢（1202-1275）を指す[94]。この当時真定・河間・大名・東平・済南の路都元帥を務め、その帥府は真定に在った。つまり事実関係としては、まず定明和尚が元帥府へと請求し、これを受けて史天沢が朝廷に上奏するといったような流れでもって、海雲は臨済寺に招かれることとなったのである。また碑文の記述には、1246年に臨済寺が新たに十方禅寺に定められた際、海雲は住持を退いて弟子に席を譲り、以降は庵主通公・慵庵堅公・可庵朗公が相次いで住職を担ったという。ここに見える庵主通公とは「海雲碑」に記される「真定維摩福通」であり、同様に慵庵堅公とは「慵庵至堅」或いは「臨済志堅」がこれに当たると考えられる。2015年７月、河北省の正定にて石碑一基が発見された。そこにおいては次のような碑文が見える。

寓庵堅公禅師寿塔

提点至舜、監寺善興、維那至慶、前監寺至暉等
至元四年歳次丁卯正月初六日臨済禅寺預建[95]

この銘文によって知られるのは、この碑は本来寓庵堅公の寿塔であり、これが至元四年（1267）に臨済寺において建立された折には寓庵堅公はなお存命であったということである。寓庵堅公とは海雲の弟子である至堅と見られ、彼が長期にわたって臨済寺を主っていたことが窺われる。

この碑文が著された時期と石碑が建立された時期とについて、碑文の中には詳らかにされていない。ただし碑文の記述によると、雪堂普仁は至元二十四年（1287）秋八月に杭州に赴いて名刹を参詣し、その途上広陵（今の江蘇省揚州市）において王博文に碑文の撰述を依頼している。そこで王氏は「諸家の伝録の考証」を経てこの碑文を作ったとある。事実、雪堂普仁が王博文を訪ねてから間もない至元二十四年九月において郭天錫の碑記はすでに完成しており、また王博文の「碑銘」に見える臨済宗の伝承系譜は郭天錫の碑記と概ね同じであることから、この碑銘の完成時期は郭天錫の碑記よりも後であり、王氏はその「考証」において郭氏の文を参考したのであろう。石碑の建立年代について、劉友恒氏は至元二十四年（1287）かこれよりやや下る時期であろうと推測されている[96]。しかるに、普仁による落款に自らを「前江淮福建等処釈教総統」と称しているのは、彼が当時においてすでにこの職を退任していることを表すものである。普仁は至元三十年（1292）に「江淮福建隆興等処釈教総統」に任命されるも、「つとめて辞して就かなかった」というが[97]、この落款によって彼が最終的にはこの令を受諾するに至ったことが知られる。彼が「釈教総統」に就任してからこれを解かれるまでの間にも、恐らくある程度の時間が経過しているであろうから、したがって石碑の建立時期は至元三十年よりも遡ることはあり得ず、1290年代中後期頃と見るべきであろう。

この碑銘と前掲の普秀による序文、および郭氏による碑記はいずれも興化存奨以下における臨済宗の伝承系譜を詳細に記録しており、かつその内

容も基本的に共通している。それならば、この系譜はもともと誰によって作られたものなのであろうか。王博文は自ら「諸家の伝録を考証した」と記しているためにあたかも彼こそが作成者であるかのような印象を受けるが、実のところ王氏による「考証」は郭氏の文章よりも遅れるので、その系譜もまた彼の手に成るものではない。この系譜の作成者がこれら三人の中にいると仮定するならば、それは普秀・郭天錫のいずれかということになろう。

最後に、この碑文が著された経緯について触れたい。元刊本『臨済録』には本来従倫による序文も収められていた筈であり、この中には雪堂普仁が「偶々余杭に至り」、『臨済録』の旧本を入手したために再び刊刻することとなったとある。この碑銘によって、雪堂普仁が「偶々余杭に至った」いきさつが知り得よう。至元二十四年（1287）春、普仁は鎮陽を訪れて臨済義玄の舎利塔を参拝した際、祖師の旧跡がうら寂しい有様になっていることに心を痛めた。そこで僧統であった満公（すなわち篳庵満である）と相談し、臨済寺に豊碑を建てて祖師に供することを決めたのである。同年八月、普仁は皇帝より代香の依嘱を受けて杭州に赴くが、その道中、広陵にて王博文に会い、碑文の執筆を依頼している。ここに知られるように、普仁が余杭に到ったのは至元二十四年秋に当たり、その目的は皇帝に代わって参拝を行うことにあった。そしてまさにこの旅行によって、彼は思いがけず『臨済録』の旧本を入手する機会を得たのである。雪堂普仁は『臨済録』を重刻する傍ら、また大名・正定の両地に臨済禅師のために石碑を建てたが、これらはいずれも祖師の遺徳と学行を顕彰することを企図した事業であり、彼のこのような努力は臨済宗の振興において多大な貢献を果たしたと言えよう。

碑銘の落款からは、石碑建立の主導者が雪堂普仁であること、また同時に愚極至慧・玉山徳珍・虎岩浄伏ら、杭州の臨済僧三名が参与していたことが知られる。愚極至慧とは石田法薫の弟子であり、北禅寺に住していた際『石田和尚語録』の編集に携わっている。この時においては杭州・浄慈

寺の住持を務めていた[98]。玉山徳珍は虚舟普度の弟子で、至元二十年(1283)前後に江西・雲居寺にて『虚舟和尚語録』編纂に参加し[99]、当時は杭州・霊隠寺の住職であった。虎岩浄伏は虚舟普度の法嗣であり、以前には潭州（今の湖南省瀏陽市）の石霜寺にも住し、また臨安（今の杭州）の中天竺永祚禅寺では首座の任にあった。後に杭州･径山寺の住持ともなっている。至元二十一年（1284）に元の世祖に召されて拝謁し、戒律の観点から殺生を慎むべきことを進言したとされる。編著として『虚舟和尚語録』がある[100]。以上の三人はいずれも杭州の臨済宗において指導的役割を担った人物であり、普仁が杭州にて『臨済録』の旧本を見出したのも恐らくは彼らの協力によるものと考えられる。加えてこれらの者たちは普仁の臨済寺における石碑建立を賛助してもいるのである。これらの事実は、当時において南北の臨済宗僧侶の間で相当に親密な交流や協力が行われていたことを示すものと言える。

中国国内においてこの碑文は長年認知されずにいたが、1980年代に至って日本臨済宗の訪華団がこの碑銘を含む臨済宗資料を正定方面へと寄贈するという出来事があり[101]、これによってはじめて中国国民の知るところとなったのである。今現在すでにいくらかの研究者がこの碑銘に対して考察を加え、引用し参考に挙げており、さらに正定の臨済寺ではこの文を再び刻んで碑を建てている。ただし、これらがいずれも元刊本の原形を完全には留めていない日本伝本を底本として用いているのは、全く惜しむべきことである。

五、雪堂普仁について

前出の普秀による序文によると、当時『臨済録』はすでに目に触れがたい状況にあったため、ここにおいて雪堂普仁は他に援助を請うて旧本を探し出し、「刻梓流行」せしめたとされる。この事実については、元刊本にもと有った従倫序および郭天錫序の中にも明確な記述が存する。したがっ

て、元刊本『臨済録』が雪堂普仁の発起によって刊行されたということに疑いの余地は無い。これに留まらず、雪堂普仁は大名と正定において臨済禅師讃仰の豊碑を建立している。彼が臨済義玄の顕彰において多大なる功績を果たし、また元代禅宗史上に在って重要な位置を占める者であることが窺われよう。それでは、雪堂普仁とは果たしていかなる人物であろうか。

この雪堂普仁については、禅宗史書のうちには言及が見えない。ただし同名で全く別の人物の伝が存するため、この両人の雪堂普仁は時に混同して扱われることとなった。たとえば、椎名宏雄は永享九年（1437）刊本『臨済録』の「解題」中にて元刊本は大徳二年（1298）に作られたとした上で、「刊行者の雪堂は杭州の浄慈寺に住した高僧である」と述べ、雪堂（徳隠）普仁を発行人と見なしている[102]。ここで椎名氏が言うところの雪堂普仁（1312-1375）とは、字は徳隠、元末・明初の時期に在世し、径山師範下第四代の法孫に当たる。平生は主に浙江に暮らし、金華西峰浄土寺・婺州智者寺・杭州浄慈寺に歴住して、洪武八年（1375）に逝去している。その著書には『三会語』・『山居詩』等があり、彼に関する情報は史料中において記載が確認される[103]。椎名氏の推測によれば、元刊本『臨済録』は大徳二年（1298）に作られたというが、杭州・浄慈寺の雪堂普仁（徳隠）の生年は皇慶元年（1312）である。大徳年間にまだ生まれてもいない彼が、どうして元刊本の刊行事業に参加出来ようか。元刊本『臨済録』が杭州・浄慈寺の雪堂普仁（徳隠）と無関係であることは明らかである。

実際のところ、ここに言われる普仁はかの普仁と同一人では有り得ない。元刊本の発起人たる雪堂普仁はかつて江淮・福建等の釈教総統に補せられ、皇室の尊崇を受けたという。当時の北方臨済宗の中に在って非常に活躍した人物であるとともに、彼は同時に南方臨済宗とも相当に親密な関係を築いていた。よしんば禅宗史書中にその伝記が見えなかったとしても、元代の他の史料を通して彼の事跡を知ることは可能である。

ここでまず、元代における碑文を示したい。一つは王惲（1227-1304）の「大元国大都創建天慶寺碑銘并序」[104]、いま一つは野斎（李謙、1234-

1312）の「重陽洞林寺蔵経記」である[105]。これら二篇の記述により、普仁について以下の如く知り得る。号は雪堂、俗姓は張、許昌（今の河南省に属する）の人。寿峰湛に従って剃度し、竹林雲より戒を受け、永泰贇（すなわち西庵贇である）の下で得法する。山西で若年期を過ごし、持戒の厳粛、機鋒の鋭さで聞こえ、「名、京師を動がす」程であったと伝えられる。また駙馬高唐郡王の招請に応じ[106]、豊州（今のフフホト市）の法蔵院を司る。至元九年（1272）大都に赴き、遼代に廃せられた永泰寺弥陀院に住する。後にクビライの長孫、晋王カマラと高唐郡王の発起により、普仁のために永泰寺の旧址において天慶寺が修建されたという[107]。また京師および北方各地の臨済宗からの輿望を受けて、大都開泰寺・真定臨済寺等、十箇寺の住持を兼任したとされる。王惲の碑銘中には至元二十四年（1287）における「鎮陽を過るに、碑を樹て行を表した」という出来事についても言及され、これは王博文の碑銘と合致する。至元二十六年（1289）には、皇孫テムル（後の元・成宗）の命を奉じて「江浙の名刹に礼し、蔵経を起造した」とされ、この時刻印された４部の大蔵経と、別に購入した20部とを合わせ、北方を巡り各寺院に頒布したと伝えられる。至元三十年（1292）、「江淮福建隆興等処釈教総統」に任命される。碑銘にはまた彼の人となりを伝えて「儒学を喜び、器識有り、交わるところ皆藩維の大臣、文武の豪士たり」とも記している。彼は自らが住まう雪堂において鹿庵（商挺）・左山（王磐）ら19名の文人・士大夫と詩文を唱和して、当時の人々によって東晋の高僧慧遠の「廬阜蓮社」に喩えられたという[108]。しかるに、王惲の碑銘において永泰贇（西庵贇）は臨済第19代の法孫とされるが、これは普仁を第20代と位置付けていたことを意味するものと言える。実際には、普仁は臨済宗第18代であり、その師永泰贇は第17代に当たる。

2014年、内モンゴルの包頭市で一つの青銅鋪が発見された。その表面に刻まれた銘文には次のように言う。

雪堂総統置古銅祭器、奉施古豊宣聖廟内、永遠供養。大徳九年月日記。[109]

ここにおける記述から、雪堂普仁は大徳九年（1305）においてなお存命であり、この器物は彼によって豊州の孔子廟に奉納された祭具であることが分かる。普仁は一時期豊州に居住していた縁から、後年においても当地と関わりを持っていたのであろう。また彼も海雲印簡同様、儒教に対しても保護の立場を取っていたことが窺われる。普仁の生没年に関しては史料に記載が見えないものの、元貞元年（1295）から延祐五年（1318）までの「滎陽洞林寺聖旨碑」[110]によると、彼は元・仁宗の延祐年間（1314-1320）においても健在であり、さらに「司空」の官職まで与えられていることが知られる。

この他、雪堂普仁の史料としては、彼が『禅源諸詮集都序』（以下『都序』）を重刊した当時に惟大・鄧文原（1258-1328）・賈汝舟等の人々によって作られた三篇の序文が存する[111]。このうち惟大と鄧文原の序は大徳七年（1303）に作られている。この三序に示されるように、普仁は『臨済録』の重刊以外に、宗密の『都序』をも以前に重刻していたのである。もともと普仁の師である西庵贇が彼に『都序』を出版するよう頼んでおり、後日、普仁は雲中（今の山西省大同市）と大都にて旧本を手に入れ、これらによる校勘を経て新たに刊行したという。そもそも宗密が『都序』を著したのは、実に禅における種々の法門を統合することを目的とするものである。当時の仏教界の各々一辺に執して争うが如き現状に対して、普仁もまた不満を抱いていた。もしも彼が『臨済録』を重刊したことに臨済宗を統合せんとする意図が含まれていたとしたら、この『都序』の重刊はさらに進めて仏教各宗の統合を願ったものと言えよう。仏教経典、特に禅籍の出版に関して言えば、雪堂普仁は鄭州宝禅師の『頌古』と『林渓語録』をも上梓している[112]。また柳田聖山の研究によると、彼はかつて『香厳語録』・『**溈**山警策』・『般若心経』等を重刊したという[113]。その禅籍出版事業に対する熱意は推して知るべきである。

以上をまとめると、普仁とは当時の北方臨済宗における事実上の中心人物であり、広汎な学識を備え兼ねて儒釈に通じ、皇室貴族や文人士大夫ら

と親密な関係を築いていた。彼の住居である雪堂には常に文人士大夫らが「雅集」の会を開き、この場は結果的に元代における重要な詩壇となった。彼はとりわけ仏教経典の普及に努め、『臨済録』と『都序』とを重刻している。特に『臨済録』の重刊は、この祖師の聖典を以て断絶すること無からしめるものであり、彼のこのような行いは『臨済録』の流伝史において重大な意義を持つと称し得る。

それでは、雪堂普仁は一体何時『臨済録』を刊行したのだろうか。この問題について史料上には記載が無く、椎名宏雄氏は大徳二年（1298）のことであろうと推定しているが、これは日本伝本『臨済録』中に見える郭天錫の序文が作成された年号に基づくものであろう。しかるに、いま元刊本『臨済録』末尾の刊板者署名によって、この問題に対してより進んだ考察を与えることが可能である。この名簿を閲するに、普仁の刊行事業が数多の官僚士大夫による賛助を得ていたこと、またその中には馬紹・燕公楠・楊鎮・張斯立ら、それに前述の王博文や商挺といった「雪堂雅集」のメンバーが多く含まれていたことが知られる[114]。彼らは「雪堂雅集」に参加して詩文を唱和する以外に、普仁による弘法活動を積極的に支援してもいたのである。名簿中に見える人物の大半は史料中に伝が存するため、彼らが記した官職名と史伝の記載とを対照するだけで、彼らが署名を行った大体の時期を知ることが出来る。そして元刊本の刊行は、当然彼らの署名が済んだ後ということになるであろう。

例えば梁曽（1242-1322）は「兵部尚書、杭州路総管」とされているが、彼は至元十七年（1280）に兵部尚書に任ぜられ、大徳元年（1297）に杭州路総管となっている[115]。張斯立は「中書省参知政事」とあり、彼は大徳元年（1297）にこの役職に昇格している[116]。徹里（1258-1305）の署名には「福建等処行中書省平章政事」と見え、彼は至元二十四年（1287）当時にこの職に在り、大徳元年（1297）に改任されている[117]。この三人の署名はいずれも大徳元年より早くに為されたとは考えられない。忽都不丁は「江浙等処行中書省参知政事」としており、彼がこの職を担ったのは大徳六年（1302）

までで、その後は中書右丞に上っているため[118]、この署名は大德六年より前のものと推測し得る。燕公楠（1241-1303）の身分は「河南江北等処行中書省右丞」とされるが、彼は元貞元年（1295）時点でこの職を務め、大德三年（1299）に湖広へ転任している[119]。馬紹（1239-1300）は「江浙等処行中書省右丞」と見え、彼もまた元貞元年（1295）にこの職に在り、その後大德三年（1297）に河南に転任する[120]。すなわち、彼ら二人の署名は大德三年以前のものと考えられる。八都馬津（史書には「八都馬辛」につくる）は「中書省右丞」であったとされ、彼は大德二年（1298）の時においてこの職を担い、七年（1303）に解任され、八年（1304）に復職している。彼の署名が為されたのは大德二年以後であろう。高興（1245-1313）は「福建平海等処行中書省平章政事」と見え、彼は至元二十九年（1292）の時この職を務めており、次年にジャワへの出兵に伴って改任され、成宗即位（1295年）ののち復職、大德三年（1299）に江浙へ転任したとある[121]。よって彼の署名は大德三年以前と見られる。史弼（1230-1297）の署名には「江西等処行中書省平章政事」と記されており、彼は元貞元年（1295）に栄禄大夫および江西等処行中書省右丞の任を拝し、三年（1297）に平章政事に上任している[122]。梁德圭（1259-1304）は「中書省平章政事」とあり、彼は至元三十一年（1294）においてこの職を務めている[123]。忙兀台（？-1290）の署名には「江淮等処行尚書省左丞相」とあるが、彼は至元二十二年（1285）にこの職に補せられ[124]、この五年後に世を去っている。このように史・梁・忙兀台の三人の署名はすべて大德以前に為されたと推測されるものの、ただし刊板がこれよりも後だったとしても何ら差支えの無いところである。「河南江北等処行中書省平章政事」卜怜吉导（史書には「卜怜吉帯」にもつくる）については、彼がこの職務を担当した年代は至元二十八年（1291）とも、成宗の在位中であるともいい、後の大德十一年（1307）には河南行省左丞に昇格している。彼の署名は河南平章を務めた期間に為されたものと言えるだろう。これらの人物中、忙兀台の死没（1290年）が最も早く、雪堂普仁は『臨済録』を刊行するに当たり、かな

り早い時期から賛助者の募集を開始していたことが窺われる。忙兀台は生前すでに刊行事業への賛助に参加していたために、後年刊板されるに至って彼の名もまた列ねられたのであろう。卜怜吉导は河南平章の任を大徳の末年まで一貫して担っていたが、彼の署名はもっと早い時期のものと思われる。何故ならば、他の者たちが記しているのはすべて大徳三年（1299）年以前の役職であるから、卜怜吉导による署名もまたこの年より前と考えられるためである。この署名が揃った後、雪堂がすぐに開板に入ったとすれば、開板の時期は大徳三年頃となる。仮に卜怜吉の署名が大徳年間の後期であったとしても、恐らく刊板の年代は大徳年間を越えることはないだろう。このように考えるに、椎名宏雄氏の判断は基本的には適切と言えるが今一つ証拠に乏しい部分も否めず、刊行時期を大徳二年と断定することは難しいように思う。実際にはこれよりもやや遅い時期であろう。いずれにしても、雪堂が刊行した『臨済録』は至元刊本ではなく、大徳刊本と称されるべきことは確かである。

六、元刊本『臨済録』の原型

すでに上文において指摘したように、現存する元刊本『臨済録』の巻頭部分は欠損してしまっているので、本書は完全な状態ではない。それではもと有った巻頭部分はどのようなもので、如何なる内容が記されていたのだろうか。この問題を明らかにしてこそ、はじめて元刊本『臨済録』の原形が了解されると言えよう。しかしてこの問題を解決するためには、やはり日本伝本を参照する必要がある。

日本に存する様々な『臨済録』伝本のうち、従来元刊本との近しい関係が認められているものが二種ある。一つは東洋文庫所蔵の『臨済録』古刻本であり、その表紙に「臨済録　元槧本」と書かれていることから、この本が元刊本と見做されていたことが知られる。椎名宏雄氏もまたかつてこれを「元版」とされていた[125]。後年の調査を経て、この本は元版ではなく

南宋咸淳三年（1267）の鼓山版『古尊宿語録』中の一冊であることが判明している[126]。筆者が対照したところ、東洋文庫に伝えられるこの本と成簣堂文庫蔵の南宋本『臨済録』、華東師範大学蔵の南宋本『臨済録』はみな事実上同一の版本であり、これらはもともと『古尊宿語録』の中の一冊であったと見られる。もう一つは静嘉堂文庫所蔵の元応二年（1320）刊本『臨済録』であり、学者によってはこれを雪堂本（元刊本）の復刻と見ることもある。筆者も以前この書に対して調査を行ったことがあるが、これが元刊本の復刻であるという証拠を見出すことは出来なかった。いま元刊本と照らし合わせると、両者の間にははっきりと相異が見受けられ、本書が元刊本の復刻でないことは明白である。加えて、これら両種の臨済語録の初めには馬防の序のみがあり、その巻頭部分は元刊本と同一の系統とは言えない。

実際に元刊本と密切な関わりを持つのは、すでに述べてきた両種の日本伝本、すなわち『臨済録鈔』（『鎮州臨済恵照禅師語録鈔』）と『大正蔵』所收の永享本『臨済録』であり、この二本のうちには元刊本中に本来記されていた内容が伝えられている。

『臨済録鈔』の巻頭部分には従倫・郭天錫・普秀の順で三篇の「別序」が存し、これらの序文の後に馬防による序が記され、巻末には王博文の「臨済道行碑銘」をも附録している。ここに言う「別序」とは、当然ながら馬防序との相対に基づいて呼ぶものである。注意を要するのは、本書の末尾には嘉歴四年（1329）の題記があるという点である。このことから、この書の臨済語録本文もまた同時代の『臨済録』伝本である可能性が高いと推測し得る。この題記の年号は元刊本の年代と非常に近接しており、そして元刊本中に普秀の序文と王博文の碑銘が存するのはこれまで見てきた通りである。したがって、『臨済録鈔』には元刊本の内容が取り入れられており、この書の巻頭・巻末はあらゆる日本伝本の中で元刊本に最も近いものであると見るべきであろう。

次に、『大正蔵』本『臨済録』の底本は徳富蘇峰（1863-1957）旧蔵の永

享九年（1437）刊本（現在は石川武美記念図書館に収蔵される）であり、巻頭にはやはり従倫・郭天錫・普秀の序文が見える。三者の序について、本書の第一頁には以下のような説明がある。

> 右三本序（筆者註：従倫・郭天錫・普秀の序を指す）、蓋総統雪堂禅師乃臨済十八代孫、河北河南、遍尋是録、偶至余杭、得獲是本、綉梓流通序文也。雪堂仁、琅琊覚第十世的派也、嗣西庵贇也。

これはつまり三序がいずれも雪堂本（元刊本）『臨済録』にもと収録されていた内容であると記すもので、これによって三序が本来元刊本に由来するということが知り得る。永享本に関して言えば、日本には現在も多くの本が保存されているが、中でも徳富旧蔵本は他の永享本には見えない三序を備えている点で特異な例と言える。この本の三序は筆書きにて記され、それ以外の部分は刊印となっているが、『大正蔵』に収録された際にこのような区別に対する説明が為されなかったために、この三序もまた永享本中に本来有った内容であるという誤解を招きかねない状況が生じたのである。椎名宏雄氏は三序を室町時代に日本の学僧が添加したものとしているが、筆者の所見では、この部分の紙型は後の刊本部分と完全に一致するため、これら三序が本書の作成時に補足として書き入れられたものであることは明らかである。

この他、京都大学蔵の延徳三年（1491）刊本『臨済録』には筆にて書かれた注釈が見える。その中「別序」に関する注釈として次のように記される。

> 臨済恵照玄公大宗師語録云云、三玄在手、七事随身云云、此録多序。

「臨済恵照玄公大宗師語録」という題名は三序に出るもので、「三玄在手、七事随身」という一節は普秀の序文から引かれている。そしてここに「多

序」とあるのは、三序のことを指すものであろう。注釈者はやはり室町時代の人物と思われるが、彼が三序を見ていたことは疑いのないところである。

これらの伝本に鑑みて、元刊本の巻頭には本来三序があったことが知られる。具体的に言えば、普秀の序の前にさらに従倫と郭天錫による序が存したのである。元刊本が世に出るや、速やかに日本へと伝えられて普及するに至り、ここにおいて三序と王博文の碑銘は日本伝本中に保存されることとなる。三序は宋刊本の馬防序と異なる由来を持ち、これによって「別序」と称された。すなわち日本伝本における特有の価値とはその中に三篇の「別序」を備えることであり、我々はこれによってはじめて元刊本巻頭部分の原貌を知り得るのである。

以下に挙げるのは、『臨済録鈔』を底本として従倫と郭天錫による序文を転録し、『大正蔵』本と対校したものである。

臨済慧照玄公大宗師語録序

曹渓派列、淘涌而流注無窮、南岳岐分、巍峨而聯綿不尽、雲仍曼衍、枝葉滋栄、非止蔭覆人天、抑亦光揚祖道。無説之説、須知意不在言、無聞之聞、果信言非有意、此皆理極無喩之道、緒余影響者也。故臨済祖師、以正法眼、明涅槃心、興大智大慈、運大機大用、棒頭喝下、剿絶凡情、電掣星馳、卒難搆副、豈容擬議、那許追思。非唯鶏過新羅、欲使鳳趨霄漢、不留朕跡、透脱玄関、令三界迷徒、帰一真実際。天下英流、莫不仰瞻、為一宗之祖、理当然也。今総統雪堂禅師、乃臨済十八代孫、河北河[127]南、遍尋是録、偶至余杭、得獲是本、如貧得宝、似暗得灯、踊**跃**歓呼、不勝感激。遂舎長財、綉梓流通、俵施諸刹。此一端奇事、実千載難逢。咦、擲地金声聞四海、定知珠玉価難酬。元貞二年歳次丁未[128]、大都報恩禅寺住持嗣祖林泉老人従倫盥手焚香謹序[129]。

臨済慧照玄公大宗師語録序

薄伽梵正法眼蔵、涅槃妙心、付摩訶迦葉、是為第一祖。逮二十八祖菩提達磨、提十方三世諸仏密印、而来震旦、是時中国、始知仏法有教外別伝、不立文字、直指人心、見性成仏。厥後優鉢羅華于時出現、芬芳馥郁、一花五葉、香風匝地、宝色照天、各施[130]放無量光明、輝映大千世界。其中一大苾芻、為一大事因縁、依栖黄檗山中、三度参請、三度被打、後向高安灘頭大愚老師処、始全印証。平生用金剛王宝剣、逢凡殺凡、逢聖殺聖、風行草偃、号令八方。如雪色象王、如金毛師子、踞地哮吼、狐狸野干、心破脳裂、百獣見之、無不股慄。如惍濤険崖、壁立万仞、使途中之人、其行次且不敢、挙足下足、惟恐喪身失命、雖老子鉗鎚者、見之無不汗下。若夫三要三玄[131]、奪境奪人、金章玉句、如風檣陣馬、如迅雷奔霆、陵轢波濤、穿穴険固、破陣敵[132]、天回地転、七縦八横、況[133]于截断衆流、四海学徒、莫不望風披靡。故門庭峻峭、孤硬難入。蓋妙用功夫、不在文字、不離文字、尽大地作一只眼者、乃能識之。末後将正法眼蔵、却向瞎驢辺滅却。師之出処、具載伝灯等録、茲不復贅。自興化奨公而下、子孫雲仍、最為蕃衍盛大。多大根器人、冠映河岳、騰輝[134]古今、在在処処、法席叢林、化俗談真、重規畳矩、出広長舌相、為人開堂演法。如慈明円公、琅琊覚公、皆大法王、人天師也。今雪堂大禅師、臨済十八代嫡孫、琅琊第十世的派、王臣尊礼、緇素向慕、是亦僧中之竜象爾。不忘祖師恩徳、毎恨臨済一言一句、一棒一喝、参承咨決、陞堂入室語録、未大発明、刻梓流行、用広禅林観聴。仍求北山居士郭天錫、為作序引。嗚呼、雪堂老師、行従上祖師難能之事、慎終追遠、知恩報恩、則不無将五百年風顛老漢吐下唾団、重新拈出供養。今代衲僧、還肯咀嚼么。合浦還珠、固為奇特、冷灰爆豆、亦自不妨。

大徳二年八月前監察御史郭天錫焚香九拝書[135]

従倫の序は元貞二年（1296）の作で、その大意は以下の如くである。「禅宗は慧能より以降、今に至るまで不断に繁栄している。歴代の祖師は説法を行ってきたとはいえ、しかし用心は言句に在るものではない。終極の道理は言語によって表現し得ないため、彼らの言葉はただ得道の痕跡たるに

過ぎない。臨済禅師は正法眼を具え、自らの智慧と慈悲とに基づき大機大用を発揮した。師は棒喝の方法を用いて学人を啓発したが、これは彼らに真理を領知せしめんがためであり、これ故に尊崇を受けて臨済宗の祖となったのである。臨済宗の法裔である雪堂普仁は、かつて黄河の南北に亘って遍く『臨済録』を探し求めたが、遂に見つけることが叶わなかった。後に偶然杭州にてこれを入手するに及んでは、歓喜すること至宝を得るが如くであった。ここにおいて新たに本書を上梓し、各寺院に寄贈した」という。

ここに知られるように、当時『臨済録』は極めて稀少であったため、雪堂普仁は当初北方にこれを求めたが一向に見つからず、後年たまたま杭州にて落掌することとなったのである。序文中には普仁が得た『臨済録』についていずれの書であるかを言及していないが、柳田聖山はかつてこれを「元代の宗演本『臨済録』の重刊」[136]と述べている。つまり雪堂普仁が重刻したのは北宋宗演刊本であると見るのである。宗演本は現在すでに失われているものの、一般には前述した南宋咸淳刊本と同系統の書と考えられている。いま確認してみるに、元刊本の臨済語録は南宋本と基本的に一致するため、雪堂が探し出した書とはやはり宗演本であり、重刻はこの本を用いて行われたということになろう。

序文の作者である従倫は、自ら林泉老人と号したといい、元初の曹洞僧で万松行秀（1166-1246）の弟子に当たる。以前には大都（今の北京市）の万寿寺に住し、後に報恩寺の住持となった。元・世祖の至元九年（1272）、勅を奉じて入内し、皇軍のために仏道を講じ、禅学の大旨を発揮したとされる。また至元十八年（1281）には、大都・憫忠寺において道蔵の偽経を焚書している。編著に『空谷集』・『虚堂集』等が有る[137]。従倫は当時大都の報恩寺に住し、また雪堂普仁も同じく大都に在った。この序文は普仁の依頼を受けて作られたのであろう。

郭天錫の序は大徳二年（1298）の作である。大意には次のように言う。「菩提達磨が禅宗を中国に伝えて以後、歴代の伝承を経て、許多（あまた）の支派が形成

された。臨済義玄は当初黄檗希運に従って学んでいたが、艱難辛苦を経験しながらも、ついに要領を得るに至った。彼の禅法は明了直截でありながら苛烈で容赦がなく、一般の人々には理解しがたいものである。その禅法は経典の文字に拘泥せず、かつ文字を脱却することもない。慧眼を具備した才器のみがこれを了解し得、さらにはその内容を弟子へと受け継いできた。興化存奨の代から、臨済宗は絶えず繁栄し優れた人材を輩出したが、中でも宋代の石霜楚円と琅琊慧覚の二人は特に出色と言える。雪堂普仁はこのうち琅琊慧覚の法統を嗣ぐ者で、王公大臣や道俗の信者らによる尊敬を集めている。彼は祖師の恩徳を忘れることなく、人々が臨済の禅法と語録とを十分に理解できるよう、新たに『臨済録』を刊刻した。このために私（郭天錫）に序を作ることを依頼したのである。雪堂普仁による本刊行事業は非常に困難なものであったが、彼は祖師の恩徳に報いんがために本書の重刊を果たした。ただし今日の禅僧がこれを享受するに足るか否かは定かでない」とある。

郭氏によれば、禅は本来文字に拘泥せず、祖師にとっては語録など自らが飛ばした唾にも等しいものである。雪堂普仁は他人の受け売りという謗りを顧みず、新たに『臨済録』の印刻を成し遂げた。これは充分に彼の祖師に対する孝敬の情を表すものと言えるであろう。このように評して序を結んでいる。

いま現存の元刊本を基にしつつ同時に日本伝本を参照することで、元刊本の本来の内容を復元することが可能である。現状断定出来るのは、元刊本が元々以下の八項目から成る構成を有していたということである。

1.「臨済慧照玄公大宗師語録序」　従倫撰
2.「臨済慧照玄公大宗師語録序」　郭天錫撰
3.「臨済慧照玄公大宗師語録序」　五峰普秀撰
4.「臨済慧照玄公大宗師語録」　恵然輯、延沼書
　臨済語録本文は宗演本の系統に属する。

5.「大名臨済慧照玄公大宗師碑記」 郭天錫撰

6.「臨済玄公大宗師真賛」 郭天錫撰

7.「真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘」 王博文撰

8. 刊板人署名

すでに言及したように、元刊本『臨済録』は北宋宗演本の系統に連なる書である。しかるに、宗演本の中には馬防序（「鎮州臨済慧照禅師語録序」）が収められているのだから、元刊本の中にもやはり馬防序が存した可能性があるのではないか。このような疑問は当然生ずるところであるが、筆者が思うに、元刊本中には馬防序はもとから無かったのではないだろうか。その理由として、仮に元刊本が原本となる宗演本の体裁を参考にしていたとしたら、馬防序は臨済語録本文のすぐ前にある筈であるが、しかして今存する元刊本の臨済語録の前には普秀序があるのみである。このような構成における通例に照らすならば、本文の直前は最も良い位置に当たり、馬防序はそこから外された形になる。実のところ、元刊本は完全に宗演本に依拠して復刻されたという訳では決してなく、臨済語録の本文こそ原書に則っているが、それ以外の部分には多くの改変が認められる。具体的に挙げれば、まず一つ目に宋本の「鎮州臨済慧照禅師語録」という題を改めて「臨済慧照玄公大宗師語録」としている点、二つ目は宋本中の馬防序を三序に代えている点、三つ目に宋本の奥に載せられている校勘題記（「住大名府興化嗣法小師存奬校勘」）と刊板題記（「住福州鼓山円覚苾芻宗演重開」）を削っている点である。すでにこのように多くの改変が加えられているというのに、どうしてわざわざ馬防序のみを残す道理があろうか。普秀序が本来馬防序のあった位置を占めているところを見るに、恐らく雪堂普仁は馬防序を重視していなかったのであろう。

この他、日本の江戸時代における『臨済録』刊本中、元禄十一年（1698）刊本『臨済語録摘葉』と前出の享保刊本の如きは、みな附録として趙孟頫の「臨済正宗碑」を収めている。筆者は以前からこの碑文が追加されたの

は日本伝本以降においてではないかと疑っていたが、現在の考察を通して、元刊本中にはもとからこの碑文は無かったという確信を得ることが出来た。

結語

雪堂刻印の元刊本が登場してから近代以前に至るまでの間、本書が中国において如何なる流伝を経てきたのかは未だ明らかでない。しかるに、この書は日本に齎されるに至って、日本伝本『臨済録』の親本の一つとなった。それでは一体どのようにして日本に伝えられたのであろうか。往時の具体的な経緯については現在知るべくもないが、しかし大まかな推測を立てることは許されよう。

すでに良く知られているように、元代における日中の仏教交流は相当に盛んで、双方の僧侶らによる往来は頻繁に為されていた。その当時中国から日本に渡った僧侶は現在名前が分かっている者だけで13人あったというが、実際の数は当然これよりも多かったことであろう。彼らの大半は臨済僧であり、またその中には愚極至慧と虎岩浄伏の弟子が含まれていた[138]。一方日本から中国を訪れた僧侶はさらに多く、現在伝記中に名が見える者のみを数えても220余人に上る。この中には一団を結成して訪中する者たちさえあったという。中国に滞在する間、彼らの多くは浙江一帯に赴いたが、また江西・湖南や北方の五台山・大都にまで及ぶ者もいた[139]。日本の留学僧は古来より各種典籍の捜索・収集を好み、そして雪堂普仁刻印の『臨済録』もまた各寺院へ頒布されていたのであるから、斯様に多くの入元僧が中国各地に及んでいた当時の状況に鑑みても、この書を捜そうと思えば恐らくそれほど難しいことではなかったであろう。愚極至慧と虎岩浄伏は普仁と面識があったのみならず、石碑建立事業にも参与し、さらには普仁が『臨済録』旧本を見つけ出すための助力もしていたと思われる。雪堂普仁は自ら重刊した『臨済録』を「俵施諸刹（諸寺院に分け与えた）」とされ、

また彼は愚極至慧・虎岩浄伏と親しかったというのであるから、この新刊の書を浄慈寺と径山寺とに寄贈しない理由は無かろう。さらに言えば、愚極至慧と虎岩浄伏の門下にはいずれも日本へ渡った弟子が存する。例えば愚極至慧の弟子である清拙正澄（1274-1339）は、かつて浄慈寺において「経函」のことを司っていた。彼は1326年に日本に赴き、建長・浄智・円覚・瑞鹿等の寺院に住したという。1333年には建仁寺に移り、その後南禅寺に転じたと伝わる[140]。また虎岩浄伏の弟子の明極楚俊（1262-1336）は、天童寺においては「蔵鑰」を管掌し、1330年に69歳の高齢でありながら渡日を果たした。鎌倉の建長寺に住し、晩年は京都の南禅寺・建仁寺にて過ごしている[141]。この二人の共通点は以前中国の寺院内で経蔵管理の任を担っていたことであり、よって彼らが雪堂普仁の元刊本に接していた可能性は高いと言える。彼らの他、虎岩浄伏の法孫に当たる竺仙梵仙（1292-1348）もまた明極楚俊と一緒に来日し、鎌倉の建長寺および京都の南禅寺に住している[142]。すなわち、愚極至慧と虎岩浄伏の門人の中には日本に渡った中国人僧侶が存在し、また当時中国を訪れる日本人僧侶も多くあった。雪堂による刊本は、このような者たちの手によって日本に伝えられたのであろう。

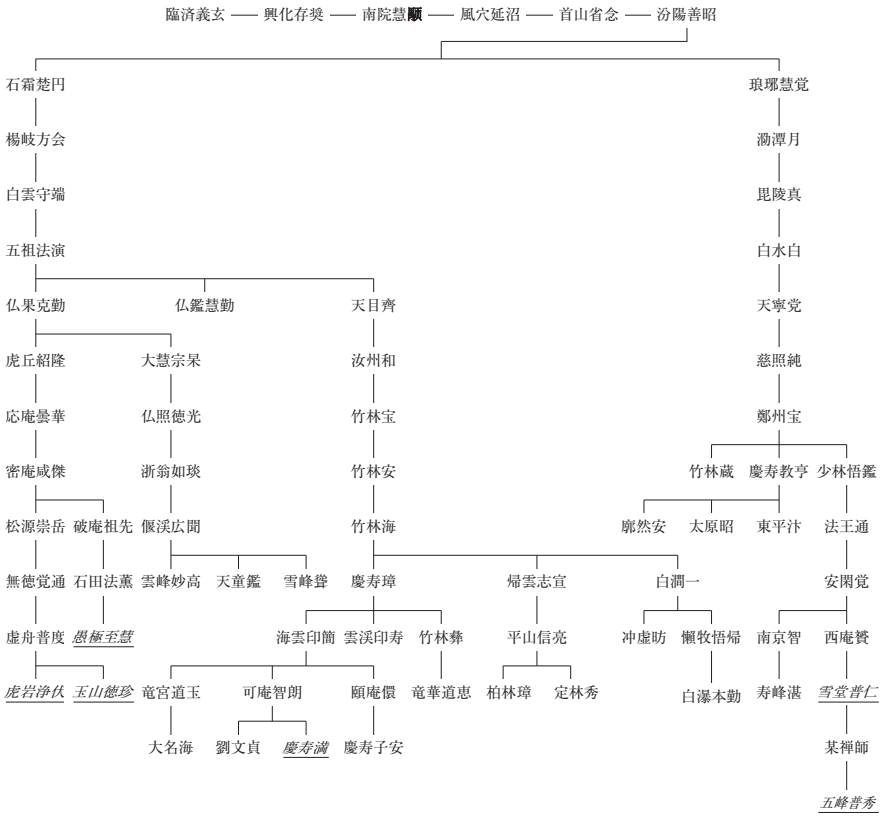
日本と比較すると、中国に遺された『臨済録』伝本はとりわけ単行本が極めて少なく、そのために元刊本が後代の中国伝本に対してどのような影響を与えたかは未だ明らかでない。しかるに、元刊本は刊行後速やかに日本へと齎され、その結果日本伝本の親本の一つとなった。今に至るまで日本伝本の中に元刊本の痕跡が見出されるのはこうした事情によるものである。この痕跡について言えば、上述した従倫・郭天錫・普秀による三序や王博文の「碑銘」等が元刊本の文章に基づくということの他に、日本伝本巻末の題記においても見出される。日本伝本の末尾における題記には三種の類型があり、一つ目には「延沼謹書」・「存奨校勘」・「宗演重開」等の三の題記を具える場合、二つ目に「延沼謹書」・「存奨校勘」の二つの題記がある場合、最後に「延沼謹書」の題記のみが見える場合である。実に「宗

演重開」の題記は北宋宗演本の影響を明確に示すものであり、「存奬校勘」の記載は南宋本の特徴と言える。そしてただ「延沼謹書」とのみ存するのは、恐らく元刊本の影響と考えられる。一方で、日本伝本の書題が元刊本の「臨済慧照玄公大宗師語録」ではなく「鎮州臨済慧照禅師語録」とされ、かつ馬防序が加えられているという点からは、宋刊本からの影響が窺われる。詰まるところ、日本伝本は宋元刊本の内容を併呑し並びに取り入れたために、かかる多種多様の状況が生じたのであろう。今日まで、『臨済録』伝本の歴史的変遷を考察するに際しては往々にして宋刊本の影響が過度に強調され、元刊本が遺した影響については顧みられることもなく不明瞭なままであった。その実、元刊本が刊行されて以降宗演本はその地位を取って代わられたと推測され、元刊本の主な部分は宋刊本と同様の価値を認められて後の伝本に影響を及ぼしたのである。今後、元刊本と日本伝本の対照研究を通して、『臨済録』伝本の歴史において元刊本が実際に与えた影響を解明することが出来るであろう。

最後に、元刊本『臨済録』が有する価値について改めて一言しておきたい。本書は宋元時代の刊刻本であり、これ自体善本古籍に属するのみならず、著名人による收蔵をも経ている。したがって、一般の古典籍に比して更に多くの文物的価値を秘めていると言える。また元代の『臨済録』刊本として、本書は天下に唯一の孤本であり、他にこれに代わるべき本は無い。今日まで保存されてきた『臨済録』古刻本の中で、本書は最も早い単行刊本であり、これよりも以前の北宋宗演本はすでに失われている。また南宋咸淳三年刊本は『古尊宿語録』中の一冊であるから、そもそも単行本ではない。本書は保存状態に関しても比較的揃っていると言え、その中には元刊本の大部分の内容が含まれている。これは元刊本の原貌を知る上で、重要な手がかりを与えてくれるものである。巻頭に見える銭良佑書写の普秀序は銭氏の書風を伝える貴重な資料と言え、巻末に収められる郭天錫による碑記と真賛もまた、本書にのみ遺される郭氏の著述である。本来元刊本中に存した三序と附録とは臨済宗の重要な史料であり、殊に金元期の北方

臨済宗を研究するに当たっては、そこにおける記述は大いに参考に値する。のみならず、元刊本はかつて日本へ齎され、以降の日本伝本に対して多大な影響を及ぼした。この書を通して、日本伝本と中国の親本との関係はもとより中日仏教交流史における幾らかの側面に至るまで、具体的に知ることが可能である。すなわち、元刊本『臨済録』は極めて貴重な古籍文物であると同時に、非常に重要な学術史料でもあり、殊のほか重視し珍重されるべき価値を有すると言えよう。

2017年21日　松山にて擱筆す



上の表中、斜体字並びに下線を引いた人物は、雪堂普仁による石碑建立或いは『臨済録』刊行に関わりのある者である。

【注】

1 「行録」の開始頁は定め難いため、ここにはしばらく「第某頁」とする。

2 繆荃孫・呉昌綬・董康『嘉業堂蔵書志』（復旦大学出版社、1997年）486-487頁。

3 百度百科「黄裳」項（http://baike.baidu.com/、2016年11月２日閲覧）参照。また竹軒「関于黄裳的蔵書印」（竹軒的博客、http://blog.sina.com.cn/、2016年11月２日閲覧）も参照されたい。

4 北京図書館編『北京図書館古籍善本書目』子部（書目文献出版社、1987年）1621頁。

5 『臨済録鈔』は『臨済録』の注釈書であり、寛永七年（1630）の刊本が存する。柳田聖山主編『臨済録抄書集成』上冊所収（中文出版社、1980年）。

6 「攔」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「欄」につくる。

7 「電」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「雷」につくる。

8 「它」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「他」につくる。

9 「六」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本にはナシ。

10 「陽」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「楊」につくる。

11 「杲」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「果」につくる。

12 「傑伝破庵先、松源岳」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「傑伝松源岳」につくり、「破庵先」はナシ。

13 「破庵先伝石田薫、薫伝浄慈愚極慧、松源」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本にはナシ。

14 「霊隠玉山珍。大慧杲伝仏照光、光伝淵翁琰、琰伝偃溪聞、聞伝雲峰高、天童鑑、雪峰聳」とある箇所は『臨済録鈔』・『大正蔵』本には見えない。

15 「帰雲宣」から「慶寿璋伝海」までの間に、『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「宣伝平山亮、白澗一伝沖虚昉、懶牧帰」とある。

16 「海雲宗師」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「海雲大宗師」につくる。

17 「竹林彝」から「海雲宗師伝可庵朗」の間に、『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「彝伝竜華恵」と見える。

18 「宗師」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本にはナシ。

19 「竹林彝伝竜華恵、白澗一伝沖虚昉、懶牧帰、帰雲宣伝平山亮、亮伝柏林璋、定林秀」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「慶寿安」から「琅**琊**覚」までの間にこの一段の文字ナシ。

20 「真伝白水白、白伝天寧党」:『臨済録鈔』には「真伝白水、白水伝天寧党」

につくる。『大正蔵』本は元刊本に同じ。

21 「太」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「大」につくる。

22 「廓然安」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本にはナシ。

23 「西庵贇」:『臨済録鈔』には「西蔵贇」につくる、『大正蔵』本は元刊本に同じ。

24 「西庵贇伝雪堂仁、雪堂乃臨済十八世孫也」:『臨済録鈔』には「西蔵贇伝雪堂、仁乃臨済十八世孫也」につくる。『大正蔵』本は元刊本に同じ。

25 「雪堂乃吾三世」:『臨済録鈔』・『大正蔵』本には「雪堂禅師乃吾三世祖」につくる。

26 「予」:『大正蔵』本には「子」につくる、『臨済録鈔』は元刊本に同じ。

27 「率」:『臨済録鈔』には「卒」につくる、『大正蔵』本は元刊本に同じ。

28 「開泰退堂襲祖第二十世孫五峰普秀斎沐焚香拝序」:『臨済録鈔』には「開泰退堂襲祖第三十世孫五峰普秀斎休焚香拝書」につくり、『大正蔵』本には「開泰退堂襲祖第二十世孫五峰普秀斎沐焚香拝書」につくる。

29 陸川堆雲『臨済及臨済録の研究』(東京・喜久屋書店、1949年) 1頁。

30 明・盧熊『蘇州府志』巻38「人物·文芸」(洪武十二年(1379)抄本)参照。

31 「中都竹林禅寺清公塔銘」(張雲濤『潭柘寺碑記』、北京・中国文史出版社、2010年、139-243頁)参照。

32 有才「北京西山竹林寺考」(新浪博客、http://blog.sina.com.cn、2017年2月9日閲覧)参照。

33 『析津志輯佚』「寺観」条(中国哲学書電子化計画、http://ctext.org/、2017年2月9日閲覧)参照。

34 清・自融『南宋元明禅林僧宝伝』巻八に「齊参五祖演和尚、得演記莂、遂隠天目。当其時、出五祖之門者化遍南州、而三仏之裔称盛。独齊公居天目、甚枯淡、法席寥然、暮年始有懶牛和上座紹齊之法、而和之枯淡尤甚、僅得竹林宝、宝得竹林安、安禅容菴海、海之名頗著、乃有中和璋。璋之下有印簡出焉、簡出、則齊之道大于北平矣」とある。

35 包世軒『北京仏教史地考』(北京・金城出版社、2014年)258-260頁参照。福源の伝記は明・明河の『補続高僧伝』巻13に見える。

36 元・孟祥「虚閑大禅師道行志」(『全元文』第17冊、南京・江蘇古籍出版社、2000年、27頁)参照。

37 「渾源州永安禅寺第一代帰雲大禅師塔銘」(北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本滙編』第48冊、鄭州・中州古籍出版社、1990年)

11-12頁、閻鳳梧主編『全遼金文』下冊（太原・山西古籍出版社、2002年）3711-3712頁、張雲濤『潭柘寺碑記』244-249頁参照。

38 張雲濤『潭柘寺碑記』244-250頁参照。

39 明・文琇『増集続伝灯録』巻3参照。

40 「大蒙古国燕京大慶寿寺西堂海雲大禅師碑」（現在北京法源寺に存す、「海雲碑」と略称される）の記載に「甲申（1224年）秋、……道出義州、以中和祖塋之在、往致奠焉」と見え、また「壬辰（1232年）六月、師在永慶、聞中和示寂、奔赴其喪、与諸弟子皆以礼殯葬之」と記される。

41 北京遼金城垣博物館編『北京遼金元拓片集』（北京・北京燕山出版社、2012年）144頁参照。

42 包世軒『北京仏教史地考』201頁参照。本勤に関する資料としては、西雲子安が撰した「元白瀑寺勤公禅師塔」（北京石刻芸術博物館編『新日下訪碑録 石景山巻 門頭溝巻』、北京・北京燕山出版社、2015年、509頁）がある。

43 「護必烈大王令旨碑」（『北京図書館蔵中国歴代石刻拓片滙編』第48冊、177頁）、王博文「臨済道行碑銘」・「海雲碑」、周清澍「忽必烈早年的活動和手蹟」（『歴史教学』2005年第7期）等参照。

44 「真定府在城十方万歳禅寺荘産碑」（劉友恒「従「真定路十方万歳禅寺荘産碑」看正定歴史上另一座臨済宗寺院」、『文物春秋』2009年第3期）参照。

45 元・趙孟頫「臨済正宗碑」（『松雪斎集』巻9）参照。

46 元・程鉅夫「大慶寿寺大蔵経碑」（『雪楼集』巻18、電子版『四庫全書』）参照。

47 金・大定十九年（1179）「汝州香山観音禅院第十代故慈照大禅師塔銘」（『石刻史料新編』第三輯・第30冊所収『宝豊県志』巻16「金石」145-146頁および王新英編『全金石刻聞輯校』長春・吉林文史出版社、2012年、232-233頁）参照。

48 温玉成「紅蓼花開：普照宝公諸弟子在少林寺」（大家論壇、http://club.topsage.com/、2016年5月7日閲覧）、李輝「金朝臨済宗源流考」（『世界宗教研究』、2011年第1期）参照。

49 顧燮光編『古志滙目』巻6参照。

50 趙会軍・趙明星「篙山竹林寺略考」（『文物建築』第6輯、2013年）参照。

51 元・従倫「洞林大覚禅寺第一代西堂宝公大宗師頌古序」（『全元文』第20冊、南京・江蘇古籍出版社、2000年、515頁）参照。

52 「杲」：原本には「果」につくる、今はこれを改める。

53 陸川堆雲『臨済録詳解』23-31頁参照。

54　宗典「辨郭畀非郭祐之及其偽画」（『文物』1965年第8期、36-39頁）参照。郭天錫と郭畀の生沒年について、宗典はそれぞれ1248-1302と1280-1335としているが、本稿では現状一般的な説の方を採用することとした。

55　柳田聖山主編『臨済録抄書集成』下冊には本書の影印本が収録されている。

56　享保本に関しては、原刊本以外にも1967年に臨済禅師奉賛会が刊行した新印本である『無著道忠校訂 臨済禅師語録』が参考される。本稿の校勘はこの新印本に照らして行った。ここではしばらく「校訂享保本」と称する。

57　「大鑑」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本にはナシ。

58　「邢」:『摘葉』・校訂享保本には「刑」につくる。

59　「賾」:『摘葉』には「頤」につくる。

60　「子」:『摘葉』には「于」、校訂享保本には「干」につくる。

61　「陀」:『臨済録抄』には「院」につくり、『摘葉』・校訂享保本には「沱」につくる。

62　「乃師法叔」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「師之法叔」につくる。

63　「離相離名」:『摘葉』・校訂享保本には「離名離相」につくる。

64　「而逝」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「示寂」につくる。

65　「茶」:『摘葉』・校訂享保本には「荼」につくる。

66　「壤」:校訂享保本には「壊」につくる。

67　「荒」:『臨済録抄』には「菜」につくる。

68　「曰」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本にはナシ。

69　「楊」:『臨済録抄』には「陽」につくる。

70　「杲」:『臨済録抄』には「果」につくる。

71　「隆」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「虎丘隆」につくる。

72　「先」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「破庵」につくる。

73　「岳」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「松源」につくる。

74　「度伝虎岩伏」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「度伝径山虎岩伏」につくる。

75　「玉山珍。大慧伝仏照光、光伝淵翁琰、琰伝偃溪聞、聞伝雲峰高、天童鑑、雪峰聳」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本にはナシ。

76　「帰雲宣」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本にはこの語の後に「宣伝平山亮、白澗一伝沖虚昉、懶牧帰」につくる。

77　「璋伝海雲宗師、竹林彝」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「慶寿璋伝海雲大宗師、竹林彝」につくる。この句の後、『臨済録抄』には「竹林彝

伝竜華恵」につくり、『摘葉』・校訂享保本には「彝伝竜華恵」につくる。

78 「朗伝太傅劉文貞公」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「可庵朗伝太傅劉文貞公、慶寿満」につくる。

79 「玉伝大名海、儇伝慶寿安」:『臨済録抄』には「竜宮玉伝大名海、頤庵伝慶寿安」につくり、『摘葉』・校訂享保本は『臨済録抄』に同じ（ただし「頤」を「賾」につくる）。この句の後、『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「琅琊覚伝泐潭月」につくる。

80 「亮伝柏林璋、定林秀」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本にはナシ。

81 「亨」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「慶寿亨」につくる。

82 「廓然安」:『臨済録抄』、『摘葉』、校訂享保本にはナシ。

83 「鑑」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「少林鑑」につくる。

84 「智伝寿峰湛、贇伝雪堂仁」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「南京智伝寿峰湛、西庵贇伝雪堂仁公」につくる。

85 「真」:『臨済録抄』には「直」につくる。

86 「承」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「乗」につくる。

87 「位」:『摘葉』には「為」につくる。

88 「宝」:『臨済録抄』には「法」につくる。

89 「亡」:『臨済録抄』・『摘葉』・校訂享保本には「已」につくる。

90 「諭」:『臨済録抄』には「論」につくる。

91 劉友恒・李秀婷「〈真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘〉浅談」（『文物春秋』2007年第５期）参照。

92 この点については、陸川堆雲にも言及が存する（『臨済及臨済録の研究』111頁参照）。

93 「海雲碑」に「歳在乙未（1235年）、鎮陽史帥疏請住持府中之臨済禅寺、師重念祖師道場之地、即応其命。既至、乃為興修、頓成壮麗、仍不憚往返、互為主持之」と記される。

94 史天沢に関しては、『元史』巻155に伝が見える。

95 張国清・貢俊録・劉友恒「元代臨済寺「寓庵堅公禅師寿塔」銘考」（『文物春秋』2015年第４期）参照。

96 劉友恒・李秀婷「〈真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘〉浅談」参照。

97 野斎（李謙）「重陽洞林寺蔵経記」（蔡美彪『元代白話碑集録』北京・科学出版社、1955年、120-121頁）参照。

98 愚極至慧の伝記および語録については明・文琇『増集続伝灯録』巻４、明・

通問『続灯存稿』巻４等が参照される。

99　元･克新『有元大中大夫仏海普印広慈円悟大禅師忠公行業記』、元･継祖編『曇芳和尚語録』巻下参照。

100　元・覚岸『釈氏稽古略』巻４、明・元賢『継灯録』巻４参照。

101　劉友恒・李秀婷「〈真定十方臨済慧照玄公大宗師道行碑銘〉浅談」参照。

102　椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊』第六巻（京都・臨川書店、2016年）598-599頁参照。

103　明･宋濂『護法録』巻２『浄慈山報恩光孝禅寺住持仁公塔銘』、明･明河『補続高僧伝』巻15、明･朱時恩『仏祖綱目』巻41「徳隠普仁禅師入寂」条、清･超永『五灯全書』巻58等を参照のこと。

104　この碑銘は『秋澗集』巻57（『全元文』第６冊、南京・江蘇古籍出版社、1998年、492-494頁）に収録される。作者王惲は『元史』巻167に伝が見える。

105　この文は蔡美彪『元代白話碑集録』120-121頁に収録される。作者は李謙、野斎と号す。『元史』巻160に伝が見える。

106　元の時期においては、武将アラクシ・ディギト・クリの一族が相次いで高唐王に封ぜられている。ここでの高唐郡王とはボヨカを指すと思われる。彼は若年にして西域を征討し、後に北平王となった。チンギス・ハンの娘アラカイ・ベキを妻とし、死後高唐郡王に追封されたという。

107　天慶寺は今すでに存せず、もと在った場所は今の北京市内東暁市街一帯に当たる。

108　雪堂普仁と士大夫の交流に関しては、王惲「雪堂上人集類諸名公雅制序」中に「雪堂上人、禅悦余暇、楽従賢士夫遊、諸公亦賞其爽朗不凡、略去藩篝、与同形迹、以道義定交、文雅相接」という記述が見える（『秋澗先生大全集』巻43）。

109　「包頭燕家梁遺址発現元代祭孔銅器刻「総統」銘文」、2014年５月20日刊『内蒙古日報』（魯網、http://wh.sdnews.com.cn、2016年３月１日閲覧）。

110　蔡美彪『元代白話碑集録』36-74頁参照。

111　この三篇の序文は『大正蔵』第48冊、397b-398bに収録される。惟大の事跡については未詳であるが、当時昆山に住していたという。鄧文原は『元史』巻172に伝が見える。賈汝舟は大徳年間に国史編修・翰林待制に補せられ、かつて大使として高麗に駐留したとされる。

112　元・従倫「洞林大覚禅寺第一代西堂宝公大宗師頌古序」・「洞林大覚禅寺第一代西堂宝公大宗師林渓録序」（『全元文』第20冊、515-516頁）参照。

113　柳田聖山『臨済録の研究』（京都・法蔵館、2017年）166-167頁参照。
114　元・姚燧『跋雪堂雅集後』（『牧庵集』巻31）参照。
115　『元史』巻178所収の伝参照。
116　『元史』巻21『成宗本紀』参照、また元･閻復『中書参知政事張公先塋碑銘』（『静軒集』巻５）を参照のこと。
117　『元史』巻130所収の伝参照。
118　『新元史』巻14参照。
119　『元史』巻173所収の伝参照。
120　『元史』巻173所収の伝参照。
121　『元史』巻162所収の伝参照。
122　『元史』巻162所収の伝参照。
123　『元史』巻170所収の伝参照。
124　『元史』巻131所収の伝参照。
125　椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（東京・大東出版社、1993年）598頁参照。
126　椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊』第六巻、598頁参照。
127　「河」:『大正蔵』本には「江」につくる。
128　「丁未」:『大正蔵』本同じ。按ずるに、元貞二年は丙申に当たるため、「丁未」は「丙申」に改めるべきであろう。
129　柳田聖山主編『臨済録抄書集成』上冊（京都･中文出版社、1980年）、206頁。
130　「施」:『大正蔵』本にはナシ。
131　「三要三玄」:『大正蔵』本には「三玄三要」につくる。
132　「破陣敵」:『大正蔵』本には「破碎陣敵」につくる。
133　「況」:『大正蔵』本には「幾」につくる。
134　「輝」:『大正蔵』本には「耀」につくる。
135　柳田聖山主編『臨済録抄書集成』上冊、206頁参照。
136　柳田聖山『臨済録』（東京・大蔵出版株式会社、2008年）24頁参照。
137　従倫の伝記や語録については『五灯会元続略』巻１、『五灯厳統』巻14、『五灯全書』巻61等を参照のこと。
138　木宮泰彦『日華仏教交流史』（東京・富山房、1989年）432頁参照。
139　同上、444-464頁参照。
140　師蛮『本朝高僧伝』巻25（『大日本仏教全書』第102冊、東京・名著普及会、1979年、351-354頁）参照。
141　師蛮『本朝高僧伝』巻26（『大日本仏教全書』第102冊、361-363頁）参照。

142　師蛮『本朝高僧伝』巻27（『大日本仏教全書』第102冊、383-385頁）参照。

（翻訳担当：弓場苗生子）

Textual research of *Linji Lu*(臨濟錄)

XING Dongfeng

Linji Yixuan(?-866) is the founder of Linji Sect, whose oral record was named as *logia of Linji* (臨濟錄, *Linji Lu*). In China and Japan, Logia of Linji was widely circulated and various versions appeared. Among them, the versions from Song dynasty to Yuan dynasty attract special attentions for the Buddhist academia.

Presently logia of Linji is conserved only in two versions. One is the southern-cult's version, which is part of the *Logia of antecedent Gurus* (古尊宿語錄, *Gu Zunsu Yulu*); the other is sculpted by Chan Master Xuetang Puren and printed at Yuan dynasty, which is named unofficially as Xuetang version or Yuan version. These versions did not only emerge early, but also with historical influence. Depend on these versions, we can recognize related historical facts of Buddhism during that period. Regretfully, the academia has never done any research on the Yuan version whose value calls for reassessment.

According to my prior investigation, the Yuan version has been existing in the name of *Logia of Revere Chan Master Linji Huizhao*(臨濟慧照玄公大宗師語錄, *Linji Huizhao Xuangong Dazongshi Yulu*) since appeared. And now it's in preservation at national library of China and nowhere else. It is priceless from the perspectives of antique and historic value.

Based on the information above, this paper focuses on inspecting the sole version's circulation, its structure, its original model and the biography of its publisher Xuetang Puren.

邢東風氏の発表論文に対するコメント

野沢　佳美*
（日本　立正大学）

邢東風教授の「元刊本『臨済録』について」は、臨済義玄の単行語録として現在最古のテキストである元代刊行の『臨済慧照玄公大宗師語録』一巻（以下、元刊本と略す）について、五山版をはじめとする日本伝存諸本の序文や元代の史料・考古発掘情報などを駆使し、その来歴や特徴、刊行に関わった禅僧とその周辺の解明、さらには本来の姿（原型）の復元などを追及した重厚な論考です。

周知のごとく臨済義玄の語録は『四家語録』や『古尊宿語録』などに収録されていますが、単行本としては北宋末の宣和２（1120）年に円覚宗演が重刊したテキストがあり、馬防の序を付しています。このテキストは早く日本にも伝えられ、14～15世紀には翻刻本（五山版）が刊行されました。

今回邢教授が取り上げられたのは、中国国家図書館に現蔵される元刊本であり、まさに「天下の孤本」です。その存在は日本でも知られていましたが、こんにちまで調査・報告した研究者はおらず、邢教授の今般の報告は大変貴重な成果です。

本論文で邢教授が指摘した点は多岐にわたりますが、主な点を要約します。

（１）まず、元刊本の構成と流伝を取り上げ、他の諸本に見えない郭天錫の碑記・真賛、さらには26名におよぶ刊行協賛者の一覧が存することを指摘し、ついで袁克文（号は寒雲。袁世凱の子）→劉氏嘉業堂→黄裳→北京図書館（現・中国国家図書館）と変遷した所蔵者の伝

*立正大学文学部教授。

来経緯を明らかにする。

（2）日本伝存諸本にも見える普秀の序文につき、元刊本と日本伝存諸本との詳細な校勘を加え、また序に言及された禅僧の分析から「金元期に活躍した北方の臨済宗僧侶が非常に多く」、「この系譜によってこれらの僧が実に臨済宗の伝承系統に位置付けられ」たとする。

（3）元刊本のみに存在する郭天錫の碑記・真賛を取り上げ、未知であった貴重な史料を初めて報告する。これらを撰した者は、従来比定されていた元代後期の郭畀（字は天錫）ではなく、「元代初期に活躍した金城の郭天錫で」あったとする。

（4）日本伝存諸本にも収録される王博文の碑銘を取り上げ、元刊本と日本伝存諸本との校勘をおこないつつ、王博文の来歴を確認し、加えて碑銘の内容分析からその完成は「郭天錫の碑記よりも後」、すなわち1290年代中後期とする。そして碑銘は、元刊本を重刻した雪堂普仁の依頼でなされ、杭州近隣の禅僧の協力のもとに臨済禅師の石碑建立が果たされたことは「南北の臨済宗僧侶の間で相当に親密な交流や協力が」あったとする。

（5）至元年間の後半、余杭で『臨済録』の「旧本」を入手し重刻した雪堂普仁を取り上げる。杭州浄慈寺の雪堂（徳隠）普仁と同一人物であるとの見解を退け、元代の碑文資料の分析や考古発掘情報に基づき、生没年は未詳ながら雪堂普仁は「当時の北方臨済宗における事実上の中心人物であ」ったこと、また普仁が元刊本を刊行した時期について元刊本の末尾に一覧化された元朝高官26名の刊行協賛者の役職分析から、「開板の時期は大徳三年頃となる」との結論を導き出す。

（6）巻頭部分が欠損している元刊本の原型の復元を試みる。日本に伝存する諸本のうち、『臨済録』の注釈書である『鈔巻』（原書の成立は嘉暦４（1329）年）および「大正蔵」が底本とした「永享九（1437）年本」（徳富蘇峰旧蔵）の巻首には従倫・郭天錫・普秀の三つの序が

存在していることから、「元刊本の巻頭には本来三序があった」として元刊本の原型構成を復元し、「元刊本中には馬防序はもとから無かったのではないだろうか」とする。

本論を結ぶにあたり邢教授は、普仁の重刻元刊本を日本へもたらしたのは中・日間を往来した両国の僧侶たちが想定され、また日本伝存諸本には宋･元両版の『臨済録』の内容が含まれていることから､「これらの書が宋･元刊本を併せて採ったことで、日本の後世において多様な伝本が形成され」､「元刊本が『臨済録』の流伝史において果たした重大な働きが改めて認識される」とする。

３万字（中国語）に及ぶ邢教授の大著の論点を余すところなく指摘することは、私には到底なしえませんが、上記したように、これまで調査・報告がなされなかった元刊本について、本論文では詳細な比較分析と多角的な考察が加えられており、『臨済録』諸本の研究に新たな地平を拓いた雄編であることは間違いありません。

私は、そのような論文を拝読する栄に浴したことに感謝をしつつ、いまは邢教授に二つの点をお聞きし、コメンテーターとしての責めを果たさせていただきたい。

一点目は、（５）で言及されたように、至元24年秋頃、雪堂普仁は余杭で「旧本」を入手し、これを大徳３年頃に重刊したとされますが、邢教授は元刊本が重刊された場所はどこであったとお考えでしょうか？ 元代における出版は大都（現・北京)、平陽（山西)、杭州、建寧（福建）がその中心地とされております。普仁の経歴からすれば、大都もしくは平陽で重刊した可能性がある一方、浙江の余杭で「旧本」を入手しており、また隣接する杭州では南宋時代に引き続き多く仏書が刊行されている状況を勘案すれば、普仁は杭州で重刊したとも考えられます（ちなみに、余杭の南山大普寧寺では至元年間に大蔵経（普寧寺蔵）が開板されております)。北方臨済宗の中心人物であった普仁が江南（杭州）で元刊本を重刊したとな

れば、単に永く失われていた『臨済録』を復刊して世に弘めんとしたのみならず、北方臨済宗僧侶を含めた自派の系譜を明記した序や碑記、さらに多数の元朝高官の賛助一覧を付した元刊本を、敢えて杭州で重刊することに普仁の「なんらかの意図」があったと見ることも可能ではないでしょうか？

二点目は、（６）で指摘されたように『鈔巻』・「大正蔵」所収の「永享九年本」の巻首に三序が存在することをもって、邢教授は元刊本の巻頭にも普秀序の前に、従倫・郭天錫の序が存在したと考えて原型構成を復元され、なおかつ馬防の序は元刊本に存在しないのではとされました。『鈔巻』や「永享九年本」の巻首に追記された三序は、日本に伝わった元刊本の一つに基づいて書写されたと思われますが、それなら元刊本の本文後にのみ存在する郭天錫の碑記・真賛、王博文の碑銘、さらには26名の刊行協賛者について、なにゆえ『鈔巻』や「永享九年本」ではそれらも書写されていないのでしょうか？

私はもっぱら、宋～明代に刊行された印刷漢文大蔵経を歴史研究資料として捉え、文献学（書誌学）の研究方法を援用して研究を進めております。中国仏教学、とりわけ禅宗の展開や変遷については全くの門外漢であり、そのため邢教授のご研究を十分に理解できていないと思います。上記した要約や質問に不備・誤解等がありましたら、ご容赦願います。ただ、このような優れた研究成果に関わらせていただいたことは、私にとって大変名誉なことであり、刺激になります。邢教授および今回の機会を与えていただいた伊吹敦教授に厚く御礼を申し上げます。

以　上

野沢佳美氏のコメントに対する回答

邢　東風
（日本　愛媛大学）

小論に対して野沢先生から高い評価をいただき、誠に恐縮しながら、感謝の気持ちでいっぱいです。なぜなら、野沢先生は、小論の内容をよく理解しているのみならず、主要な論点も「余すところなく」把握したうえで、作者の私よりもうまく纏めて下さった。さらに、小論の新しい見解などをも一々指摘していただき、このようなコメントは、やはり高度な専門的知識がなければ、簡単にはできないものだと思います。野沢先生は非常に謙遜して、自らが中国仏教学の門外漢であると言っているが、実は私こそ大蔵経史の門外漢なので、もし私が野沢先生の論文を読めば、これほどのコメントはできないでしょう。とにかく、自分の研究成果を自分より見識の高い先生に読んで審議していただけることは大変光栄で幸運なことです。ここではまず、野沢先生に対して、心から感謝を申しあげたいです。

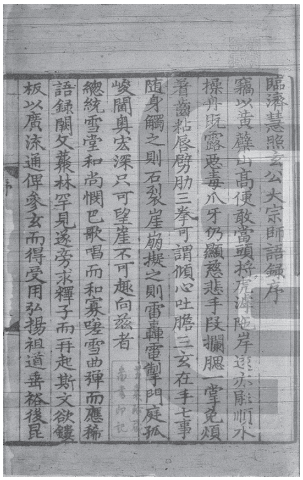
次に野沢先生のご質問に答えてみます。

第一のご質問は、元刊本を重刊した場所はどこであったか、もし杭州であれば、普仁の「なんらかの意図」があったか。確かに、元刊本『臨済録』は、仏典の出版が盛んに行なわれた宋元時代のものなので、その出版の場所が分かれば、他の関連事項も明らかになる可能性がある。だから、どこで刊行したのか、これは私も知りたいことです。残念ながら、この問題について、歴史文献の記載が見つからないので、今は答えることができません。

こうした場合、文献記載の他に、元刊本の実物自体の特徴、例えばその用紙・版式・字体・刻工名などによって、一体どこの印刷物かを明らかにすることができる可能性もあるが、しかし恥ずかしながら、私は仏典出版史・版本史などの知識が非常に乏しいので、元刊本の現物を見ても分かり

ませんでした。幸いに、野沢先生のようなこの分野の専門家がいらっしゃるので、元刊本の写真を見ていただき、或いは今後、元刊本の現物を調べることで解明できれば何よりも嬉しいです。

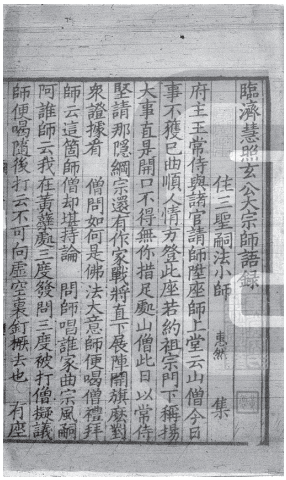
ここでは写真を添付して、ご覧いただければと思います。



臨濟慧照玄公大宗師語録序

竊以黃蘗山高便教當頭棒喝臨岸送宗風順水
操舟與露惡毒八牙仍繼慈悲手段攔腮一掌兇頑
者齒粘唇劈肋三拳可謂傾心吐膽三玄在手七事
隨身觸之則石裂崖崩擬之則雷轟電掣門庭孤
峻關與宏深只可望崖不可趣向茲者
總綱雪堂和尚憫巴歌唱而和寡陲雪曲彈而應稀
語録闕文叢林罕見遂旁求釋子而再起斯文欲鏤
板以廣流通俾參玄而得受用弘揚祖道垂裕後昆

譜秀序

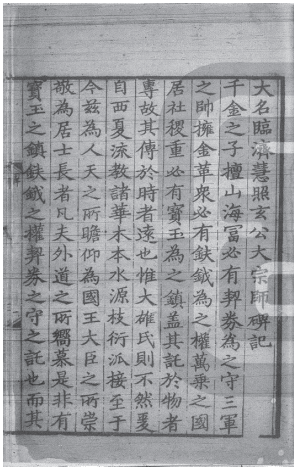


臨濟慧照玄公大宗師語録

住三聖嗣法小師　惠然　集

府主王常侍與諸官請師陞座師上堂云山僧今日
事不獲已曲順人情刁登此座若約祖宗門下稱揚
大事直是開口不得無你措足處山僧此日以常侍
堅請那隱綱宗還有作家戰將直下展陣開旗處對
衆證據看　僧問如何是佛法大意師便喝僧禮拜
師云這箇師僧却堪持論　問師唱誰家曲宗風嗣
阿誰師云我在黃蘗處三度發問三度被打僧擬議
師便喝隨後打云不可向虛空裏釘橛去也　有座

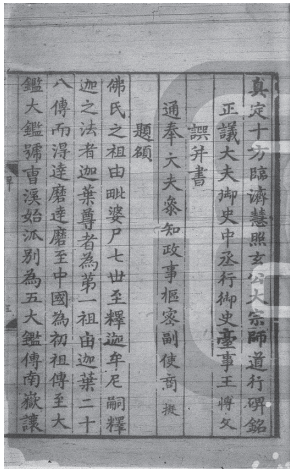
臨済語録本文



大名臨濟慧照玄公大宗師碑記

千金之子擅山海冨必有契券為之守三軍
之帥擁金革衆必有鈇鉞為之權萬乘之國
居社稷重必有寶玉為之鎮蓋其託於物者
專故其傳於時者遠也惟大雄氏則不然爰
自西夏流教諸華木本水源枝衍派接至于
今茲為人天之所瞻仰為國王大臣之所崇
敬為居士長者凡夫外道之所嚮慕是非有
寶王之鎮鈇鉞之權契券之守之託也而其

郭天錫の「碑記」



真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘

正議大夫御史中丞行御史臺事王博文
譔并書
通奉大夫參知政事樞密副使商挺
題額

佛氏之祖由毗婆尸七世至釋迦牟尼嗣釋
迦之法者迦葉尊者為第一祖由迦葉二十
八傳而得達磨達磨至中國為初祖傳至大
鑑大鑑號曹溪始派別為五大鑑傳南嶽讓

王博文の「碑銘」

今のところ、刊行場所は分からないですが、しかし雪堂普仁の経歴などを考えると、やはり北京、或いは杭州の可能性が大きいと言えます。なぜなら、北京の場合は、雪堂普仁は北京在住の時間が長く、また、北京では、金の時代以来、大蔵経の刊行もできましたから。さらに、雪堂普仁による『禅源諸詮集都序』の重刊は、北京で行われたように思われます。一方、杭州の場合、やはり野沢先生のご指摘のように、杭州は、旧本『臨済録』が発見されましたし、普寧蔵の刊行が行われたところですから。実は、普仁は杭州で大蔵経を「起造」・購入してから北方の各寺院に送ったということもありえます。ただ、元刊本『臨済録』と普寧蔵との版式は全然違うのです。

私の考えでは、普仁の「意図」は非常に明らかにしにくいので、寧ろ「意義」を言った方がよいと思います。そうすると、重刊の場所はどちらにしても、普仁の「なんらかの意義」といえば、勿論、その第一は、臨済祖師の学問と功徳（学行）を宣伝するためです。これは、柳田聖山氏の言葉を借りて言うと、当時の臨済宗の振興事業の一環です。問題は、なぜ臨済祖師の宣伝を通して臨済宗を振興させる必要があったかですが、実は、元の初期から、各宗教の間、また同じ仏教においても、各宗派の間で、争いの態勢がずっとありまして、時々激しい争いもあった。例えば、従倫は、かつて仏教と道教との論争に参与して、道教の「偽経」を燃やしたことがある。雪堂普仁の『都序』の重刊は、仏教内部の論争に関わるものです。こういった背景から見れば、雪堂普仁は、北方臨済宗の僧として、南方臨済宗の中心たる杭州から協力を得て、『臨済録』の重刊と臨済道行碑の建立とを通して、南北臨済宗を統合させるという意義がはっきりと窺えます。争いの中で、統合された臨済宗は、当然、ばらばらの状態より強くなるでしょう。普仁は一般の僧侶と違い、そもそも深謀遠慮を具えた人物です。残念ながら、後代の人々は、一隅の見にこだわって、異民族支配下の北方臨済宗の伝承、特に雪堂普仁のような臨済宗に大きな貢献をした人物さえも「忘却」してしまいましたが、これは祖師の恩を裏切ることと言わざる

を得ません。

第二のご質問は、元刊本の付録部分には、王博文の「碑銘」以外、他の内容もあったが、なぜ日本伝本ではそれらの内容が書写されなかったかです。これは、私の気が付かなかった問題で、正直にいえば、原因は分かりません。ですが、現存の日本伝本を見れば、その書尾は三つのタイプに分かれている。第一は付録がない、第二は王博文の「碑銘」のみ、第三は王博文の「碑銘」と趙孟頫の「臨濟正宗碑」とが付されており、その実例は、元禄十一年（1698）刊本『臨済語録摘葉』と享保十二年（1727）刊本『臨済禅師語録』とに見ることができる。第一のタイプは、元刊本の書尾と関係ないものとしてよい。第二のタイプは、元刊本の書尾から一部の内容を取り入れたものです。第三のタイプは、第二のタイプと重なる部分の他に、元刊本以外の内容を『臨済録』の書尾に加えたものです。その中で第二と第三のタイプは、いずれも書尾の内容の扱いに対する随意性が認められるように思われます。また、もう一つの可能性としては、当初、日本まで伝わってきた元刊本は数が極めて少ない、そのために、一般に見られたのは、やはり省略された謄写本しかない、その結果、元刊本の本来の様子は分からなくなった、と考えられます。

最後に小論を野沢先生に紹介していただいた伊吹先生に対しても、感謝を申し上げたいと思います。